

富山県

新湊市埋蔵文化財分布調査報告V

2001年度

2002年3月

新湊市教育委員会

富山県

新湊市埋蔵文化財分布調査報告V

2001年度

2002年3月

新湊市教育委員会

序

新湊市はかつて天然の良港である放生津潟を擁し、その潟の周辺を小河川が縱横に走って周辺地域と結び、その水の利を活かして、古くから日本海側の海運と漁業の拠点として発展してきました。

新湊には鎌倉時代に越中守護所がおかれ、また室町將軍足利義材が滞在するなど、越中の政治・経済・文化の中心として栄えました。往時の活発な人々の交流、物資の運搬などそのにぎわいが偲ばれます。

先人が残した歴史・文化は、現代に生きる私たちが未来に引き継ぐべき貴重な財産です。市内に残る遺跡も、地域に根ざした歴史を語り継いでくれる重要な郷土資料と言えます。

新湊市では平成9年度から遺跡地図を整備し、その周知と保護を図り、また開発行為との事前調整に役立てるため、市内遺跡の分布調査を行ってきました。

5か年にわたって行った分布調査も今年度の調査をもって終了しましたが、今後はこの成果をひとつの通過点として、文化財保護行政をより一層充実させるために生かしてゆくことが求められます。

この報告書には不備な点も多々あろうと思われますが、より多くの人に活用され、文化財保護の一助になりますならば幸いに存じます。

終わりになりましたが、地元の方々をはじめ多大なご協力とご支援をいただきました関係者の方々に深く感謝申し上げますとともに、今後とも文化財の保護により一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月

新湊市教育委員会

教育長 竹内伸一

例　　言

- 1 本書は、新湊市教育委員会が国庫補助をうけて5か年計画で実施している、遺跡詳細分布調査の5年目(2001年度)の調査報告書である。
- 2 調査は富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室の指導及び協力を得て、新湊市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 今年度の調査は、新湊市街地・庄西地区を対象とした。
- 4 現地調査参加者は下記のとおりである。(敬称略　五十音順)
岡田　幸　折田兄子　桐井絵里　砂田普司　関根章義　高田博文　竹谷充生　田中俊輔　丹羽直美
坂　英子　福崎裕介　福沢佳典　細田隆博　前田尚美　堀茂晃　宮田志保　吉村　晶
(以上富山大学人文学部考古学研究室学生)
- 5 本書の作成は下記の協力をうけて新湊市教育委員会文化財保護主事金三津英剛が行った。
(敬称略　五十音順)
浦山みこと　桶井悦子　立野浩美　高波清孝　矢野由紀恵
- 6 現地調査に際しては、各寺社をはじめ地元の方々より多大なご協力、ご理解を頂いた。
また横尾健一郎氏他には資料の借用・掲載にご協力を頂いた。記して謝意を表したい。
- 7 本書の作成にあつたては、下記の方々から貴重なご教示をいただきいた。記して謝意を表したい。
(敬称略　五十音順)
青木一彦　岡本淳一郎　北村外雄　京田良志　境蓮勝次郎　久々忠義　島田修一　多賀令史
近岡七四郎(故人)　矢野良逸
- 8 採集遺物、記録図面等は新湊市教育委員会が一括して保存・公開している。
- 9 本書の図版の表示は下記のとおりである。
 - (1) 第4回の凡例は次のとおりである。
 -  埋蔵文化財包蔵地
 - (2) 遺物実測図中のスクリーントーンの貼り込みは次のとおり表現した。
 -  珠洲焼
 -  赤彩

目 次

本文 序 文

例 言

日 次

Iはじめに

1 新湊市の地勢と環境	1
2 調査の目的と方法	1
3 2001年度調査地区概要	2

II 調査の概要

1 調査結果概要	6
(1) 高周波遺跡 (周知)	6
(2) 八幡宮遺跡 (周知)	6
(3) 放生津台場跡 (周知)	7
(4) 荒屋遺跡 (周知)	7
(5) 神保寺遺跡 (周知)	7
(6) 放生津城跡跡 (周知)	8
(7) 報土寺庵寺跡 (周知)	8
(8) 大石川遺跡 (周知)	8
(9) 一本杉A遺跡 (周知)	9
(10) 興化庵寺跡 (新規)	9
(11) 一本杉B遺跡 (周知、範囲変更)	10
(12) 蛭柑山遺跡 (周知、名称変更)	10
(13) 肴戸伏間遺跡 (周知)	10
(14) 金屋畠遺跡 (新規)	11
(15) 川原遺跡 (周知、範囲変更)	11
(16) 鳥巣子形遺跡 (周知、範囲変更)	11
(17) 万福寺遺跡 (新規)	12
(18) 禅興寺・長徳寺庵寺跡 (総合、範囲変更)	12
(19) 六渡寺遺跡 (新規)	13
2 中世期石造物について	14
3 中世の放生津について	17
4 小結	19
III 調査のまとめ	21

挿 図

第1図 新湊市位置図	1
第2図 調査地区割図 (1/75,000)	3
第3図 E地区概要図 (1/50,000)	3
第4図 E地区遺跡地図 (1/10,000)	5
第5図 中川放生津と寺院等所在推定地 (1/25,000)	18
第6図 石造物計測部位	28
第1表 中世放生津所在寺院	18
第2表 平成13年度調査遺跡一覧	20
第3表 中世期石造物一覧	25

図 版

図版 1 遺物実測図 (1/3)	29
図版 2 中世期石造物実測図 (1)	30
図版 3 中世期石造物実測図 (2)	31
図版 4 中世期石造物実測図 (3)	32
図版 5 中世期石造物実測図 (4)	33
図版 6 中世期石造物実測図 (5)	34
図版 7 中世期石造物実測図 (6)	35
図版 8 中世期石造物実測図 (7)	36
図版 9 中世期石造物実測図 (8)	37
図版10 中世期石造物実測図 (9)	38
図版11 E地区内中世期石造物所在地図	39
図版12 市街地中心部小字図	40

写真図版

写真図版 1 航空写真	41
写真図版 2 調査風景	42
写真図版 3 調査風景	43
写真図版 4 遺跡現況	44
写真図版 5 遺跡現況	45
写真図版 6 遺跡現況	46
写真図版 7 遺跡現況	47
写真図版 8 遺跡現況	48
写真図版 9 遺跡現況	49
写真図版10 遺跡現況・図版1 遺物	50
写真図版11 中世期石造物 (1)	51
写真図版12 中世期石造物 (2)	52
写真図版13 中世期石造物 (3)	53
写真図版14 中世期石造物 (4)	54
写真図版15 中世期石造物 (5)	55
写真図版16 中世期石造物 (6)	56
写真図版17 中世期石造物 (7)	57
写真図版18 中世期石造物 (8)	58
写真図版19 中世期石造物 (9)	59

I はじめに

1 新湊市の地勢と環境

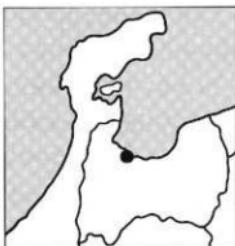
新湊市は、富山平野を東西に分ける與羽山丘陵の西側に位置し、富山湾へ注ぐ庄川の最下流東岸に広がる低湿地を中心とした市域を形成している。東西11.25km、南北6.74kmと東西に長い市であり、人口は約3万8千人である。現在の主な産業にはアルミ加工をはじめとし、地場産業である製材業及び漁業などがある。

射水平野と呼ばれるこの低湿地の中央には、かつて、海退や土砂の堆積によってつくられた放生津潟があり、現在は富山新港として利用されている。

放生津潟は、縄文時代前期の縄文海進のころは、現在の射水丘陵のあたりまで広がっていたとみられる。その後、気候の寒冷化に伴って次第に陸地化し、庄川・和田川・下条川・鍛冶川・神楽川などの諸河川によって運ばれた土砂は、所々に微高地を形成していった。このような氾濫流路間につくられた自然堤防洲などを中心に、この土地での人々の生活が始まったと考えられている。

古代には高岡市伏木に国衙が置かれ、近くには亘理淡が設けられた。しかし気候の寒冷化に伴う海水面の低下によりその機能が低下したため、現在の新湊市街地である放生津にその機能が移されたと考えられている。鎌倉時代中頃には、放生津の地名が現れるようになる。中世の放生津は、越中の守護所が置かれるなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

往時は三角洲の末端のように低湿で、特に潟の周辺は水郷の低湿地であったという。低湿地の多くが水田に利用され、縦横に水路が走り、タズルやイクリと呼ばれる船の交通路ともなっていた。稲架用と水路の岸崩れ防止に植えられたトネリコ並木が、水郷地帯ならではの独特の景観をかもし出していたが、昭和30年代から40年代にかけてすすめられた富山新港設置や場整備などにより、湿田解消の努力が重ねられ、周辺の景観は一変した。



第1図 新湊市位置図

2 調査の目的と方法

新湊市では昭和30年代から40年代にかけて富山新港設置や場整備などの大型の事業が進められた。これまで工事中に上器などの遺物が見つかっても注意が払われることは少なく、あるいは工事の妨げになるものとして除外されることもあった。かつては海であり、新湊市のような低湿な土地には人々は生活していなかったと考えられがちだったのだろう。

富山県が昭和47年（1972）に発行した『富山県遺跡地図』には、新湊市の遺跡は34か所記載されている。また平成5年（1993）発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』には、39か所の遺跡が記載されている。これは昭和40年代の調査が基となるため、伝聞・推定によるものや、開発行為に先立つ調査によって明らかになったものが多く、未調査地域も残されているものと思われる。

ここ数年、開発行為に先立ち散在的に行う分布調査や発掘調査によって、新たに発見される遺跡や、範囲の修正が必要と思われる遺跡、中には人知れず葬られていった遺跡も少なからず存在することがわかつてきた。そこで、埋蔵文化財の保護と活用、開発行為との調整のため、市域全体を対象とする系統だった分布調査を行い遺跡地図及び台帳を充実させることとした。調査は新湊市が国庫補助をうけ、富山大学考古学研究室、富山県埋蔵文化財センターの指導と協力を得て5か年計画で実施することとなった。

各年度ごとの調査は、市域を地形・面積からA～Eの5つの地区に区分して行った。平成9年度にA（塚原）地区、10年度にB（作道）地区、11年度にC（片口・七美）地区、12年度にD（堀岡・海老江・本江）地区の調査を順次実施し、今年度のE（新湊・庄西）地区の調査をもって5か年に渡る現地調査を終了した（第2図）。

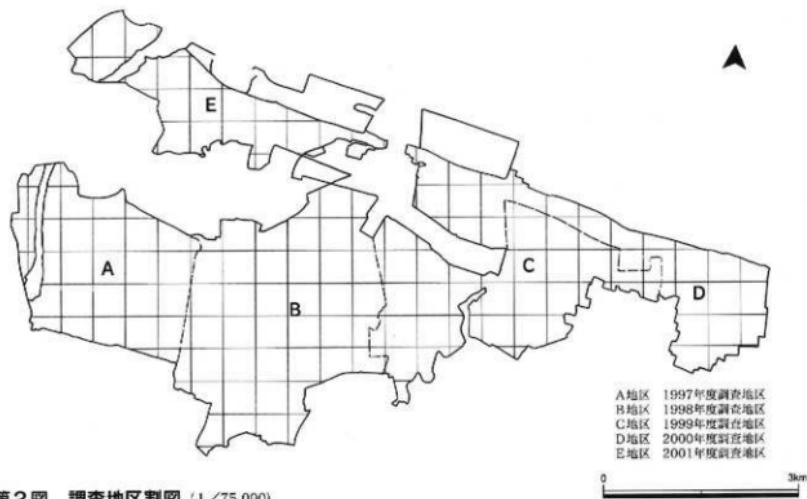
3 2001年度調査地区概要（第3図）

今年度の調査対象地区であるE地区は、現在の新湊市の中心市街地であり、昭和26年の市制施行当時の市域である。範囲は富山新港西岸～小矢部川河口付近までの東西約5.0kmで、北は富山湾、南側は高岡市牧野地区に接する。当地区と市南部地域の塚原・作道地区の間には、高岡市牧野地区が楔のように入り込んでおり市域を分断する形となっているが、もともとは舟根保、姫野保と呼ばれた地域で、海岸部の放生津と共に発展してきた地域であり、両地区は密接な繋がりをもつ。

また現在では中心市街地と庄西地区とは庄川によって東西に分かれているが、かつて庄川は高岡市の吉久付近で小矢部川と合流し伏木で富山湾に注いでいたため、六道寺・三ヶ新と呼ばれていた庄西地区は、東側の放生津と地続きであった。現在の流路は明治33年～大正元年にかけて行われた河川改修によって新たに設けられたものである。詳しくは後述するが、この庄川掘削工事以前の地形は近世以降のものであり、中世より先には庄川が現在の市街地に流れ込むなど一帯の地形はさらに大きく異なっていたことが、過去の研究や『表層地質富山』等から伺うことができる。

古来より当地は、奈良と呼ばれた景勝の地であり、越中国司大伴家持をはじめ、宗良親王や飯尾宗祇などの多くの歌人がその情景を歌に詠んでいる。また家持の歌からは、奈良時代からこの地に漁業を営む集落が存在していたことがわかる。

鎌倉時代になると、「放生津」の名が史料に現れる。放生津潟を擁し、庄川・小矢部川・神楽川水系をはじめとする諸河川によって県西部の各地と繋がる放生津は、天然の良港・交通の要所であり、沙弥本阿に代表される時衆をはじめ、多くの海運業者達が活躍した日本海海運の要衝でもあった。鎌倉～室



町時代までの間、越中の守護所がこの地に置かれ、北条氏・門の名越氏、室町幕府の三管領家である畠山氏、斯波氏らが守護をつとめる越中の政治・経済の中心地として繁栄した。畠山氏の守護代、神保氏統治時代の明応2年（1493）には室町幕府將軍足利義材が乱を逃れ、5年にわたって当地に滞在し、一時小幕府の様相を呈していたことからもその勢力の大きさが伺える。放生津湊周辺や曾根（現在の三日曾根・四日曾根・西新湊・善光寺付近）の地には真言律宗禪興寺・時宗報土寺・臨濟宗興化寺など、各宗派の寺院が建ち並んでいたという。

しかし放生津は、その重要性ゆえに幾たびもの戦乱に見舞われている。鎌倉時代末期には守護名越時有と越中武士団、南北朝時代には守護斯波義将と桃井直常、戦国時代には守護代神保・椎名氏と越後の長尾・上杉氏と越中をめぐる戦乱の際には常に戰火にみまわれ、町並みが灰燼に帰すことも度々あったと考えられる。永正17年（1520）神保慶宗が越後の長尾為影との戦いで敗死し、戦乱の続く中で放生津は壊滅的打撃を受け、以後越中の政治的中心地は富山・高岡へと移っていった。

その後、放生津は天正年間（1573～1591）頃には復興したようであり、近世には漁業・海運業の盛んな港町として栄えた。その後、慶安2年（1649）には内川の南に放生津新町が誕生、江戸時代後期には周辺の村々まで町並みが拡大してゆき、今日の新湊の基礎ができあがった。



第4図 E地区遺跡地図 (1/10,000)

II 調査の概要

1 調査結果概要

調査対象地区では、1972年発行『富山県遺跡地図』・1993年発行『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』とともに15箇所の遺跡の存在が記載されており、調査開始時点(平成13年4月)では放生津台場跡(203001:県遺跡番号、以下同)、八幡宮遺跡(203002)、高周波遺跡(203003)、荒屋遺跡(203004)、神保守遺跡(203005)、放生津城跡(203006)、報土寺廃寺跡(203007)、一本杉A遺跡(203008)、大行川遺跡(203009)、一本杉B遺跡(203010)、長徳寺廃寺跡(203011)、憲興寺廃寺跡(203012)、川原遺跡(203013)、烏帽子形遺跡(203014)、背戸狭間遺跡(203015)の15遺跡が周知されていた。調査の結果新たに4か所の遺跡を発見し、4遺跡において名称・範囲変更を行った。

(1) 高周波遺跡 (周知: 第4図-1)

八幡町の日本高周波鋼業株式会社富山製造所敷地内に所在する古代の遺物散布地であり、東西約100m・南北約80mを測る。現在では工場敷地内であり、遺跡の表面観察は不可能である。同工場は昭和12年に当地に設立されているため、初めて埋蔵文化財包蔵地の調査が行われた昭和30年代には既に現地での踏査・確認は不可能な状態であった。過去に須恵器の出土ありとの記録はあるが、現在では伝わっておらず、遺跡の内容は不明のままである。

(2) 八幡宮遺跡 (周知: 第4図-2)

現在の放生津八幡宮一帯を遺跡範囲とし、鎌倉時代～近世の遺跡として周知されている。社伝によると大伴家持が国司在任中、宇佐八幡宮から八幡神を勧請したのが始まりで、北条時政が再興、名越時有が社殿造営、その後上杉謙信の兵火にかかり、神保長職が再興したとされる。現在の社殿は文久3年再建のものである。

今回の調査では、八幡宮境内地の東側を中心に中世期の遺物(図版1-1~9)が散布していた。1は中世上師器皿、2は16世紀代の瀬戸美濃天目茶碗で鉄軸が施される。3~9は珠洲焼で、5の口縁部形態や焼成不良の8等がみられ、吉岡編年(吉岡1994)の珠洲第IV~VI期にかけてのものと考えられる。その他、八幡宮東側に隣接する本誓寺墓地でも珠洲焼の胴部破片(図版1-10)を探集した。

八幡宮境内では過去にも珠洲焼が採集されているが、これらの遺物は本来、現在の砂丘下の泥炭層中に帰属するものと考えられている(青木他1998)。高瀬保氏の研究でも、荒屋や堀岡古明神からの遺物の出土例から、かつての砂丘が現在より北側に位置しており、海岸汀線の後退によって徐々に南側へ移動してきたことが記されている(高瀬1964)。高瀬氏が例に挙げた遺物は15世紀~16世紀初頭頃の珠洲焼であり、同地点から14世紀末~15世紀前半頃の宝篋印塔基礎が出土していることから、この砂丘の状態が中世期のものと判断できる。また当遺跡より約500m南に位置する放生津城跡では地下約

1.2mの地点に中世の遺構面が存在し、荒屋の遺物出土地点との標高がほぼ一致することから、中世期には付近一帯はほとんど標高差をもたないフラットな地形であったと考えられる。そうすると、中世期の砂丘がさらに北側に位置するすれば、仮にこの地に中世の放生津八幡宮が存在するとしても地下数メートルの地点に位置することになる。

（3）放生津台場跡（周知：第4図-3）

放生津八幡宮境内の北端が江戸時代末期の台場跡といわれる。嘉永年間、藩は緊迫しつつある対外関係に備える海防政策として、異国船に対して砲撃を行い退散させるため、この放生津をはじめ伏木・生地等、海辺の要所に砲台場の整備を計画した。嘉永3年（1850）には藩主前田齊泰も実地検分のためにこの地を訪れているが、計画図以外の記録がほとんど残されていないため、詳細は不明である。

付近では放生津八幡宮を中心として、中世～近代以降にの遺物が多く分布しているが、周囲の環境や遺跡の年代から、当遺跡固有の遺物であるかどうかの判断はできなかった。

（4）荒屋遺跡（周知：第4図-4）

八幡町に所在する中世の遺物散布地で、八幡公園付近一帯の東西約110m・南北約100mの範囲に広がる。昭和29年、下水工事の際に地下約1.2mの位置から15～16世紀代の株洲焼の破片が出土している（岡崎1966）。他に板石塔婆の出土も知られているが、現在西福寺に所在する板石塔婆や、かつて新湊市東部中学校に所蔵されていた宝篋印塔基礎も当遺跡からの出土とされる（青木他1998）。明応3年（1493）足利義材が放生津に逃れた際に一時滞在した正光寺をこの地に比定する説もあるが、確証はない。また過去に荒屋地内で縄文土器が出土したとされるが詳細は不明である。なお、一帯の小字名は舟入となっており、隣接地区には芦原・特田など水や湿地に關係すると思われる小字名が残る。

（5）神保寺遺跡（周知：第4図-5）

放生津城跡の内川を挟んだ対岸に位置する、室時代町の墓地とされている遺跡で、東西約70m・南北約90mを測る。現在西福寺に所在する中世期の石造物は、明治時代に当遺跡から出土したものである。「新湊町史料第1輯」によると明治17年春、南島久七宅の庭先の中心近く三尺程掘り下げた場所から30点あまりの石造物が出土した。ちょうど井桁のように積み重ねられており、さらに二尺程掘り下げた所に赤色の土塊があったという。その後庭内の別の場所より上塊状の棺の様なものが出土したらしく、最終的に數十点が出土したらしい。石造物はその後散逸し、現在では図版2～4に掲載した36点が残されている。出土したものの大半は14～15世紀代の板石塔婆であるが、五輪塔・宝篋印塔も見られる。板石塔婆は五輪塔や宝篋印塔を浮彫したものが多く、中には永正2年在銘のものが含まれていたという。図版4-28の五輪塔火輪は、高さに比べて幅が広く軒が真反りするなど、13世紀後半頃とされる福岡町西明寺塚五輪塔に類似するもので13世紀代まで遡る可能性がある。

当遺跡の内川を挟んだ対岸に放生津城跡が所在するため、城に関係する墓地とされるが、石造物の出土状況や、中に近世のものも含まれていることから出土地点が現位置となる可能性は低く、必ずしも墓地とは言えない。これらの石造物は後後に周辺から寄せ集められ、井桁として転用されたものと考えられる。一帯の小字名が神保寺であることから、神保氏統治時代の放生津城に関係する遺跡であろうか。

(6) 放生津城跡（周知：第4図-6）

放生津城跡は、現在放生津小学校のグラウンド下に埋もれている。江戸時代以降、放生津城は城跡として各種文献、絵図に記載されており、寛文10年（1670）の「加越能古跡」によると城は本丸と二ノ郭（丸）から構成され、本丸南北70間（126m）、東西45間（81m）、南西の堀幅10間（18m）、東北大川幅25間（45m）、二の郭南北28間（50.4m）、東西20間（36m）であり、面積は本丸約10,206m²、二の郭（丸）約1,814m²となる。城の規模は文献によって若干の記述の差は見られるものの、ほぼ同様の規模と記されている。なお「加越能古跡」に記載される城の規模は、古くても戦国時代に入つてからのものとされる（新潟市史）が、詳しいことはわかっていない。また鎌倉時代の越中守護所と室町時代の放生津城・神保館が同一のものであるか否かも現段階では明確にできない。

昭和63年・平成元年・同3年に県埋蔵文化財センターによって試掘調査が行われており、調査では14世紀・15~16世紀を中心とする遺物が出土し、溝や土坑、堀を思わせるような落ち込みが確認されている。湧水が激かつたため、城の範囲の北・東・西側は確認はできていないが、昭和63・平成3年度調査時に確認された落ち込みが堀跡で、城の南端と考えられている。

(7) 報土寺廢寺跡（周知：第4図-7）

国道415号線立町交差点の南東に位置する鎌倉・室町時代の寺院跡で、東西約90m・南北約90mを測る。報土寺は鎌倉時代末期頃の創建とされる時宗道場である。「遊行上人縁起絵」には正応5年（1292）時宗の開祖一遍上人の弟子他阿真教が放生津を訪ね、南条九郎という武士に説法を行っている場面があり、このころから時宗の道場が存在していたらしい。時衆は「大乗院文書」に見られる放生津・三国湊相論の当事者、沙弥本阿に代表されるように海運業と深く関わりを持ち、そのため水運の便に恵まれた放生津に拠点を置くことになったと考えられる。享保7年（1722）「専念寺由来書」によれば、報土寺は文明16年（1484）に淨土真宗に転派し現在の専念寺となったという。

報土寺の所在地については現在地の他に、「専念寺由来書」では旧大字法上寺村字今堀（現新潟市久々湊）とあり、青木一彦他の研究（青木他1998）では現大乗寺、曼陀羅寺付近と推定されているが、現段階ではまだ不明な点が多い。

(8) 大石川遺跡（周知：第4図-8）

国道415号線大石橋交差点南側に位置する中世の遺物散布地で、東西約140m・南北約90mを測る。

過去に遺跡中央部を流れる大石川の改修工事が行われ、その際に現在のNTT西日本新湊支店西側の地下約1.5mの地点から礎石状の石が見つかったという。また岡版10-142の一石五輪塔が付近から出土している。一石五輪塔は水輪部に如来像の浮彫が施され、像容もはっきりとしていることから15世紀でも比較的古い時期のものと考えられる。遺跡所在地の東側に塚田という小字があり、南側に興化庵寺跡があることから、これらに関係する遺跡と考えられる。また同地からは他に弥生時代後期の器台も出土しているが、現在では所在不明となっている（新湊市史）。

（9）一本杉A遺跡（周知：第4図-9）

新湊郵便局一帯に位置する古代の遺物散布地で、東西約80m・南北約100mを測る。郵便局建設工事の際に須恵器が出土したとされるが、詳細は不明である。

（10）興化庵寺跡（周知：第4図-10）

興化庵寺跡は、昭和37年・47年の埋蔵文化財包蔵地調査カード（遺跡地図作製時の調査台帳）に遺跡名としては記載されているが、所在地および遺跡範囲が確定していなかったため、平成5年埋蔵文化財包蔵地図では抹消されている。

興化寺は鎌倉末期～南北朝時代のはじめ頃の創建とされる臨濟宗寺院で、恭翁連良（？～1341）の創建と伝えられる。南北朝時代の争乱で一度は焼失したらしいが、応永9年（1402）に再建される。京都建仁寺などへの出世寺とされ、永享9年（1437）頃には越中の五山系寺院の最高位である十刹位となる。興化寺は永禄（1558～1570）年間の末頃までは当地に存在していたようであるが、廃寺となった後にはその所在地も全く不明となっており、天正大地震（1586）で庄川の流れが変化し、伽藍の全てが河床に沈んだといわれる。

興化寺の所在地を推定すると、まず「連良伝」の興化寺創建の伝承に「十文字河辺」という記述があり、伽藍の全てが庄川河床に沈んだといわれることから、かなり大きな河川の合流地点付近に所在していたことが考えられる。この十文字河辺を、表層地質図などに見られる善光寺から四日市根を通り奈良町沖へ流れる旧河川跡と神楽川の合流地点付近（第5図）とみれば、現在の中央文化会館や新湊小学校の付近が想定できる。この地点より北側に位置する小字大石からは礎石と考えられる扁平な巨石が見つかっているが、大石という地名の由来は地下に大きな石があり、掘削が困難であることから付いた名称であるという。一帯が低湿地であり付近では自然の巨石がほとんど存在しないと思われるため、これを寺院関係の礎石と見ることもできる。また上地区画整理事業の際に小字大石から現在の中央文化会館・福祉会館にかけての広い範囲で遺物が出土したという記録がある。

以上の点から遺跡所在地を新湊市中央文化会館一帯の東西約180m・南北約210mの範囲に推定し、興化庵寺跡とした。なお、遺跡の北東部に位置する大石川遺跡も同様の遺跡であることから、両遺跡が一連のものとなる可能性が高い。

(11) 一本杉B遺跡（周知：第4図-11）

新湊市中央文化会館の北西方向、加越能鉄道万葉線南側を中心に広がる弥生時代・中世の遺物散布地であり、東西約150m・南北約100mを測る。

現在では所在不明となっているが、遺跡範囲の東端付近でかつて完形の土器が出上しており、同じく西端付近のもと田町川が流れていた地点からは石仏が出土したという。当時を知る人に写真で確認していただいたところ、弥生時代後期の器台と14世紀後半頃の一石一尊仏であることが確認できた。また遺跡中央部にある墓地には中世期の石造物（図版9-107～120）がまとまって所在する。墓地の隣接地には数十年前まで寺院が所在しており、前述の一石一尊仏を含め、周辺から出土した石造物はこの寺院に保管されていたといわれる。このことから同地点に所在する石造物が付近からの出土である可能性が高いと考えられる。墓地には14世紀中頃を中心とする石造物が所在することから、禪興寺・長徳寺や興化寺との関係も考えられる。遺物出上場所が明確であるため、遺跡範囲を東西に拡大した。

(12) 蜜柑田遺跡（名称変更：第4図-12）

農協会館南側に位置する中世の遺跡で、かつて禪興寺廃寺跡とされていた遺跡である。平成12年度に試掘調査が行われたが、地下1m以上に後世の整地土（西新湊土地区画整理事業時のものか）と考えられる砂礫層が堆積し、その下部は黒色の腐植土であった。試掘調査ではそれ以上の掘削は行っていないが、遺跡付近は善光寺から渋口に向かって流れる旧河川跡（第5図④）と推定されるため、調査地点はちょうどこの河川跡に位置するものと考えられる。周辺からは中世期の石造物が多く出土したいわれ、西新湊地蔵堂内の「一石一尊仏」（写真図版13-126・127）は当遺跡からの出土という。また付近には図版9-122の板石塔婆があり、これも付近からの出土と考えられる。今回の調査で禪興寺廃寺跡の所在地を新湊高校北側一帯としたため、遺跡所在地の小字名をとって、蜜柑田遺跡と名称を変更した。

(13) 背戸狭間遺跡（周知：第4図-13）

善光寺に所在する弥生・古墳・古代の遺物散布地で、遺跡範囲は東西約390m・南北約170mを測る。昭和47年の埋蔵文化財包蔵地調査カードには、他に要佐・高段・前狭間・金屋畠の4遺跡が記載されており、それぞれの遺跡から須恵器・土師器が出土したと記録されている。これらの遺物は当地住民の矢野信一氏が採集されたものであるが、現在では散逸してしまっており、当人も亡くなられたため詳細は不明である。このうち小字要佐では昭和37年に農道排水工事の際に地底1.2mから30点あまりの土器片が出土したと新湊市史に記載されている。遺物は現在では所在不明であるが、市史の記述によると器種には高杯・盞・皿等とあり、「櫛目文」の記載があることから弥生中期～古墳時代にかけてのものと考えられる。旧地籍図（図版12）を見ると高段・要佐・前狭間の各遺跡は小字背戸狭間の周囲にみられる小字名であり、かつて周辺が烟地として利用されていることからも、遺跡の南側を流れていた旧河道（第5図②）によって形成された自然堤防上に広がる同一の遺跡と考えられる。

図版1-18は個人所蔵の遺物で当遺跡出土の土師器小型盞である。西新湊土地区画整理事業の工事

中に遺跡範囲西端、現在の富山地方鉄道・新湊自動車駐車所付近より出土したものであり、口縁部を欠いているが頸部以下は完形である。胎土・焼成とも良好で、器面全体が赤彩され、全面にヘラミガキが施されている。出土した当時は畠地であり、周囲より一段高い場所であったという。ブルドーザーによる削平時の出土で、所有者の記憶によると、黄灰色粘土層上の黒色土中より出土したということであり、何らかの遺構からの出土であることは間違いない。なお同図版14～17の古墳時代前期頃の土師器も、西新湊上地区面整理事業の際に出土したものであるが、いずれの地からの出土であるかは判然としない。

(14) 金屋烟遺跡 (新規: 第4図-14)

今回新たに埋蔵文化財包蔵地とした遺跡で、善光寺地内の新湊・高岡両市の行政区境に位置する。遺跡範囲は東西約370m・南北約60mである。昭和47年埋蔵文化財包蔵地調査カードの背戸狭間遺跡に併記されている4遺跡の一つで、須恵器・土師器が出土したと記載されている。ただ要佐・高段・前狹間が現在の背戸狭間遺跡に含まれているのに対し、小字金屋烟のみが飛び地となって背戸狭間遺跡に含まれていない。また背戸狭間遺跡との間には旧河川跡と推定される場所（第5図②）があるため、対岸の自然堤防上に位置する別の遺跡と考えられる。須恵器・土師器という記載のみからは遺跡の時期を明確にできないが、高岡市側の隣接地に弥生～中世の中曾根北遺跡が所在することから、この遺跡との関連が考えられ、弥生時代から中世頃にかけての遺跡と推定する。

(15) 川原遺跡 (周知、範囲変更: 第4図-15)

新湊高校グラウンドから善光寺公園にかけて広がる縄文・弥生・古代の遺物散布地で、遺跡範囲は東西約200m・南北約130mを測る。昭和55年4月に新湊高等学校の南側に隣接する善光寺公園内で、県埋蔵文化財センターによる試掘調査が実施されており、弥生時代末期の高杯及び土師器片が十数点出土しているが、その後資料の再確認により縄文土器の存在も確認されている。遺跡所在地は河原の小字名が示すとおり、遺跡西側を流れていた旧河道（第5図①）の自然堤防上に位置する。また遺跡西側は新湊・高岡両市の行政区境であり、高岡市側に縄文～古代の三日曾根遺跡が所在していることから、両者は同一の遺跡と考えられる。図版1-12・13は試掘調査出土遺物で縄文土器の破片である。試掘調査の結果から現在の包蔵地を東側に拡張した。

(16) 烏帽子形遺跡 (周知、範囲変更: 第4図-16)

主要地方道新湊庄川線の善光寺交差点北西に位置する古代の遺物散布地で、南北約260m・東西約150mを測る。須恵器・土師器が出土したという記録があり、それらの遺物は当地在住の矢野信一氏が採集されたものであるが、現在では散逸してしまっており、当人も亡くなられたため詳細は不明である。

遺跡の名称は当地の小字名から取ったものであるが、昭和47年の埋蔵文化財包蔵地調査カードには、他に納戸場という小字名も記載されており、遺物の散布地は当地から北側にかけての範囲に広がってい

たようである。また付近在住の方の話によると、過去に小字納戸場南部の新湊・庄川線沿いから遺物が出土しているという。この遺跡所在地も川原遺跡同様、遺跡の西側を北流する旧河道（第5図①）の自然堤防上にあたり、烏帽子形という小字名も微高地状の地形であったことを表している。以上の点から遺跡範囲が小字烏帽子形・納戸場にかけて広がると考えられるため、遺跡範囲を北側へ拡張した。

(17) 万福寺遺跡（新規：第4図-17）

今回新たに埋蔵文化財包蔵地とした遺跡である。当遺跡では、昭和55年に遺物出土を伝える埋蔵文化財発見届が提出されている。遺物は現在では散逸してしまっているが、発見届に略図及び測定値が記されているので、ある程度の情報を得ることができる。それによると出土した遺物は一石五輪塔1、五輪塔空風輪1、火輪1、水輪2、地輪2の計7点である。このうち一石五輪塔とされるものは略図を見る限りでは板石塔婆であるが、五輪塔と記されているため浮彫や線刻があった可能性もある。五輪塔は空輪から地輪までの一式がそろっており、付近に安置されていた場所があったと考えられる。略図に記された計測値から四角錐形の板石塔婆、欠首の立たない五輪塔空風輪が復元でき、14世紀末～15世紀頃のものと考えられる。出土遺物の内容及び出土地点が確認できるため、一帯の小字名をとって東西約90m・南北約110mの範囲を万福寺遺跡とした。なお地名が寺院との関係を示すものかどうかはわからないが、遺跡の位置や出土遺物から、禪興寺・長徳寺や興化寺に関係する遺跡とも考えられる。

(18) 禪興寺・長徳寺廃寺跡（新規：第4図-18）

禪興寺は大和西大寺末寺の真言律宗寺院である。創建年代は鎌倉時代中期の弘安年間以前とされ、西大寺中興の祖叡尊の存命中には既に伽藍が整っており、越中における真言律宗寺院の筆頭となっていたという。正平19年（1364）以降記録が見られなくなることから、南北朝の争乱期に戦禍に遭い14世紀の後半に廃絶したとされる。

長徳寺は禪興寺の尼寺でもと大慈院と称し、同寺の山内に西隣していたという。鎌倉時代末期～南北朝時代にかけての創建と考えられており、明徳4年（1392）に長徳寺と改称した。室町時代末期頃から記録が見られなくなるため、この頃には廃絶していたと考えられている。

善光寺・長徳寺の所在地については、以前より西新湊の新湊高校付近と考えられている。しかし、埋蔵文化財包蔵地調査カードには両者の所在地が新湊高校付近と記載されているが、昭和47年以降の遺跡地図上では、遺跡範囲がそれぞれ現在の蜜柑田遺跡、農協会館一帯となっており、位置的には寺院跡と推定されるだけの根拠がない。

『西人寺諸国末寺報』等の文献から両寺院の所在地を推定すると、まず長徳寺が大慈院と呼ばれていたころ禪興寺山内に所在しており、その西側に隣接していたことが記されている。また禪興寺の所在地を示す記述として「善光寺山來覺書」に「善光寺清水町と申す所に大寺有り、七道伽藍も有り、町中に大川有り、一方の川岸問屋町、一方は流町、中に大橋有りてこの川大門川筋數多の大船人込、橋長き五～六十間計有り、この橋思案橋と申す云々」とある。出来書自体の信憑性は定かではないが、善光寺と

いう地名や幅50~60間（90~108m）の川が善光寺（西新湊・善光寺一帯）付近を流れていたこと、この川が大門川（庄川）の水系であることなどは、新湊高校西側を流れていた旧河川跡（第5図①）と一致する。一方長徳寺は旧大字長徳寺（現本町一・二丁目）の小字舟附に所在したとされ、長徳寺の地名は現在でも残っている。これらのことから、禪興寺と長徳寺が元来同一の寺院であり、互いに隣接していたことや、善光寺、長徳寺付近に所在していたことがわかる。

次に周辺の出土遺物から見ると、所在推定地とされる新湊高校一帯での遺物の出土は昭和初期頃から知られており、特に禪興寺寺跡出土遺物とされるものの中には珠洲仏像・板石塔婆・宝篋印塔等があり、寺院との関係を伺わせる。昭和30年代に市内の埋蔵文化財包蔵地調査を行った故近岡七四郎氏からのご教示によると、最も遺物が集中していた場所は現在の新湊高校北側から万葉線の間にかけての範囲及び同校の西側であり、遺物には仏具や宝篋印塔などの石造物が多く見られたという。

また西新湊在住の当時を知る方の話によると、昭和初年に現在の新湊高校から国道415号線にかけての範囲で土地区画整理が行われた際に、珠洲仏像・板石塔婆・宝篋印塔などの石造物が出土し、この前後に新湊高校敷地内にあった「仏塚」が取り壊され、内容は不明であるが遺物が出土したという。また本人が作業に従事された70年程前の用水掘削工事の際には、市役所西側の国道415号線本町交差点から内川の藤見橋にかけての範囲で遺物が出土したという。このことは、先の近岡氏の言われた内容とも一致し、新湊高校一帯から北側にかけて中世の遺跡が存在していたことがわかる。

これらの点をふまえて明治初期の「長徳寺町字引絵図」（図版12）をみると、大字長徳寺北部の水田区画が牧野川・内川の影響を受け、複雑な水路を張り巡らせたものとなっているのに対して、大字二日苜根との境界（現新湊高校正門）付近から北側の小字舟附・前田一帯は、南側を向く凸字状の方形区画となっている。この方形区画は人工的な地形の改変を受けたものと考えられ、堀状の地割がこの区画を囲むように配置されている。この場所は、先に述べた中世の遺物出土地点とも重複し、出土遺物の内容からも寺院と関連する可能性が高い。また出土遺物の珠洲仏像は吉岡編年（吉岡1994）の珠洲二期（13世紀～14世紀前半）を中心にしてみられるものであり、他に13世紀前半頃の珠洲焼も出土している（青木外1998）ことから、年代的にも鎌倉時代中期頃の創建とされる禪興寺の存続時期と矛盾はない。

区画の規模は、東西南北約400mの広大なものである。禪興寺や長徳寺の規模がどのくらいのものであったかは定かでないが、この区画が寺院だけでなく、それに付随した集落あるいは港湾等の関係施設を含めて構成されていた考えれば相応の規模と考えられる。興国2年～3年（1341～42）頃後醍醐天皇の皇子宗良親王が越中奈良坂の地を訪れた際、長徳寺の小字舟附に上陸したとされることも、当時この地が何らかの港湾関係施設が存在していたことを示しているのであろう。以上の点から、禪興寺・長徳寺両施設跡を統合して埋蔵文化財包蔵地とした。

（19）六渡寺遺跡（新規：第4図-18）

今回新たに埋蔵文化財包蔵地とした場所で、六渡寺日枝神社境内一帯の東西約120m・南北約140mを遺跡範囲とした。この日枝社はもと山王社と呼ばれ、社伝によると創建は養老元年以前であるという。

また現在日枝神社には市指定文化財の阿弥陀如来（室町中期）・薬師如来（室町中期）・釈迦如来（平

安末期)が祀られており、神仏混淆の名残を残している。

社伝の真意は定かではないが六渡寺日枝神社の勧請は中世以前と考えられており、「越中志徵」には六渡寺の地名の出来について「六渡寺村、此村に、いにしえ六動寺という大寺あり。故に邑名とす。古名は鹿子と伝。」とあり、「源平衰衰記」には「六動寺の国府」と記されている。また寿永2年(1183)木曾義仲がここに陣を敷き対岸の国府を攻め、元龜2年(1571)には上杉謙信もこの地に陣を敷いて一向衆の軍と対峙している。「越後下向記」では細川政元と冷泉為が沼津から当地まで小矢部川を船で下り、放生津に赴いている。

これらの記録からは六渡寺がはたして寺院であったかどうかということや、その存続年代について知ることはできないが、伏木の国府対岸に位置し、亘理の渦を擁するこの地は交通の要所として、古代以来重要な場所であったと考えられる。

図版1-11は日枝神社境内で採集した珠洲焼の胴部破片で、14~15世紀のものと考えられる。

2 中世期石造物について

今年度の調査地区は市街地が中心であり、他の地区に比べ表面探査による調査のみでは十分な成果が得られないことや、中世の守護所所在地という歴史的環境から、特に中世の遺跡の把握を目的とし、中世期石造物の所在確認と写真・実測による記録作成を行った。市内ではこれまで中世期石造物の悉皆調査は行われておらず、本来ならば市内全域を調査対象とすべきであるが、調査期間の関係や、今後の調査による資料数の増加が予想されたため、今年度の調査地区内を対象とした現時点での成果としてここに記載しておく。調査に際しては、現存するものだけでなく、過去に所在が確認されているものも加えて集成を行った。なお五輪塔や宝篋印塔など構成部分が別石から成るものは、部分別に1点として数え、実測可能なものは図版2~10に、写真の残るものは写真図版11~19にそれぞれ掲載した。実測図および写真図版の番号は第3表の番号に対応している。

石造物の年代推定にあたっては、京出良忠氏からのご教示をもとに、西井龍義氏の研究(西井1992)や、実年代を推定する良好な資料が得られている氷見市戸田薬師・脇方谷地出土世墓の調査結果を中心とし、県内での発掘調査事例を参考とした。そのうち主要なもののが分類及び年代推定の基準を以下に記す。しかし、現在市内に所在する石造物のうち、現位置を留めているものや、紀年銘のある資料は皆無であり、発掘調査での出土例も乏しい。また五輪塔なども各構成部ごとに年代を推定したため、個々の特徴が時期差を表すものか、個体差の範疇に収まるものの区分が不明瞭であり、年代観については今後修正が必要が生じてくる可能性のあることを付け加えておく。

① 五輪塔空風輪

I類：14世紀中頃

空輪頂部があまり尖らず、欠首の立つもの。

II類：14世紀後半~15世紀前半頃

空輪頂部が尖り欠首の立つもの。戸田薬師中世墓にもみられることから、15世紀前半頃まで続く

可能性がある。

III類：15世紀前半頃

空輪頂部が尖り、欠首が無いもの。

IV類：15世紀中頃～16世紀

空風輪の境界が不明瞭になり、風輪が大きくなるもの。なお上市町弓庄城出土資料（上市町教育委員会1985）や青木一彦他の研究で（青木他1998）推定されているように、16世紀代のものは空風輪が円形化し、全体的に扁平になるようである。

② 五輪塔火輪

I類：13世紀末～14世紀前半頃

軒が真反りで軒中央部と軒先の幅がほぼ等しく、高さに比べ幅が広いもの。福岡町西明寺塚所在資料や、やや時代が下る井口村宮後キンケン塚所在資料の年代観からこの時期に推定した。

II類：14世紀中頃

軒が真反りで軒中央部と軒先の幅がほぼ等しく高さと軒がほぼ等しいもの。

III類：14世紀後半頃

軒が端反りで軒中央部に比べ軒先の軒が広いもの。

IV類：14世紀末～15世紀初頭頃

軒が端反りで軒中央部に比べ軒先の軒が広く、軒下端が反らず水平で、高さに比べ幅が広くなるもの。脇方谷内出中世墓第3段階（14世紀末～15世紀初頭）に相当する。

V類：15世紀前半～末頃

IV類と同様の特徴をもち、軒口を僅かに斜めに切り下げる。年代の下限がはっきりとしないが、藪田薬師中世墓に多くみられ、上市町弓庄城出土の16世紀代の資料とも様相が異なるため、一応15世紀代に推定しておく。

③ 五輪塔水輪

I類：14世紀中頃

球の上下を裁断したような樽形のもの。比較的大型のものが多いようである。

II類：14世紀後半頃

最大径が上部にある壺形のもの。脇方谷内出中世墓第2段階（14世紀中葉～後半）にみられる。

III類：14世紀末～15世紀前半頃

最大径が胴部中央にあるもの。脇方谷内出中世墓第3段階（14世紀末～15世紀初頭）にみられる。

藪田薬師中世墓にも一定量みられることから、15世紀代まで残る可能性がある。

IV類：15世紀前半頃～16世紀

胴部中央で屈曲するソロバン玉形のもの。藪田薬師中世墓にみられる。藪田薬師中世墓ではII類に近いものも残るため、14世紀末～15世紀前半頃にかけてII～IV類が同時並行する可能性がある。

④ 五輪塔地輪

I類：14世紀

高さに比べて幅の広いもの。

II類：15世紀～16世紀

高さと幅がほぼ等しいもの。

⑤ 板石塔婆

I類：14世紀初頭～前半頃

幅と奥行きがほぼ等しく頂部のあまり尖らないもの。正面にのみ種子を大きく刻み、上下に区画線をもつ。形態は脇方谷内出中世墓の第1段階（13世紀末～14世紀初頭）のものに類似するが、掲載資料は小型で正面にのみ種子を刻むため、時期的にやや下るものと推定した。

II類：14世紀前半～中頃

幅と奥行きがほぼ等しく頂部のあまり尖らないもので、高さ1m前後の大型のもの。掲載資料は4面に種子を刻まず上下の区画線をもたないため、これを製作工程の簡略化とみれば、脇方谷内出中世墓の第1段階（13世紀末～14世紀初頭）や、I類より後出のものと考えられる。

III類：14世紀中頃～後半頃

幅と奥行きがほぼ等しく頂部のあまり尖らないもの。形態的にはI・II類に類似するが、やや小型で正面にのみ種子を刻み、上下の区画線はみられない。

IV類：14世紀末～15世紀初頭頃

幅と奥行きがほぼ等しく、五輪塔・宝篋印塔の浮彫がみられる。浮彫が細部まで明瞭で、頂部のあまり尖らないものと、尖るもの両方がある。

V類：15世紀前半頃

幅と奥行きがほぼ等しく、頂部が尖るもの。脇方谷内出中世墓第4段階（15世紀前半）や15世紀代の藪田薬師中世墓Ⅲ類にみられる。藪田薬師中世墓Ⅲ類には方錐形に近いものと、扁平なもののが含まれ、板石塔婆は全体的に方錐形から扁平なものへと変化を辿るようである。五輪塔・宝篋印塔の浮彫がみられるが、細部が省略され全体的に不明瞭である。

VI類：15世紀中頃～末頃

奥行きに比べて幅が広い扁平なもので、頂部が尖るもの。脇方谷内出中世墓第4段階（15世紀前半）にみられず、15世紀代の藪田薬師中世墓Ⅲ類にみられる。16世紀代にまで残る可能性もあるが一応15世紀代に推定しておく。

VII類：15世紀中頃～16世紀

板状削行に五輪塔形を刻むもの。脇方谷内出中世墓第4段階（15世紀前半）みられず、15世紀代の藪田薬師中世墓V類にみられる。藪田薬師中世墓ではⅢ類からV類への変化が示されていることからVI類より後出のものと考えられる。

VIII類：15世紀中頃～16世紀

全体的に丸みを帯び、中央部が膨らむもの。掲載した光山寺の資料は粗粒砂岩製であるため、川原石を用いた自然面を残すタイプの模倣と考えられる。

⑥ 一石一尊仏

I類：14世紀中頃

蓮華座を含めた像容がはっきりとし、厚みのあるもの。

II類：14世紀後半～15世紀初頭頃

造形が簡略化し厚みの無くなるもの。脇方谷内出中世墓の第4段階（15世紀前半）や藪山薬師中世墓にみられることから15世紀代に下る可能性もあるが、掲載資料は像容がまだ比較的はつきりとしており古相を示すと考えられるため、一応この時期に推定しておく。

⑦ 一石五輪塔

I類：15世紀

水輪が丸く、地輪が方形または長方形の幅広のもの。全体的に彫りが深い。

II類：16世紀

水輪が角張り、地輪が縦長のもの。全体的に柱状に近く彫りが浅い。一石五輪塔は16世紀代のものが多々みられるが、脇方谷内出中世墓の第4段階（15世紀前半）には既に存在している。I・II類に時期差を求めるすれば、加工の簡略化が進んだII類が新しい様相を示すと考えられるため、時期を大まかに推定してみた。

3 中世の放生津について

次に分布調査結果をもとに中世の放生津について考え、今年度調査のまとめとしたい。

中世の放生津については、青木一彦他の考古史料を中心とした詳細な研究がある。この研究は遺跡や石造物の分布から中世放生津の地形・寺院の所在地を推定した点で特筆すべき成果が得られ、多くの情報を与えてくれる（青木他1998）。以下の考察も基本的にはこれに準ずるものであり、記述に重複する部分も多いと思われるが、分布調査の結果得られた新たな知見や、旧地籍図から読みとれる情報もふまえて中世放生津の様相を考えてみたい。

まず、調査結果概要の項でもふれた中世放生津の地形について概観してみる。中世以前に庄川の本流が放生津に向かって流れていることは『表層地質図富山』など地質の方からも確認されている。その流れは、庄川が現在の伏木台地手前で小矢部川から分流し東方に流れを変え、上牧野と宮袋の間を通り、中曾根と善光寺の境界付近で北・東方向に分流し、一方は六渡寺へ（第5図①）、もう一方は東へ向かい四日曾根の東側を通って奈呉町付近で海に達する（第5図②）。この旧河川の痕跡は、現在でも水田の区画や新湊・高岡両市の境界線として残り、明治初期の地引絵図（岡版12）にもそれが表れている。河川跡地には川原・石名田・野開・高野田などの河川や湿地帯に関する地名がみられ、その周囲には烏帽子形・高段・金屋畑などの地名があり、畠地として利用されていることから、これらの場所が河川によって形成された自然堤防であることがわかる。四日曾根の東側を通る流路は、小字高野田・湯の詰付近で当時もっと川幅が広かったとされる神楽川（第5図③）と合流してそのまま放生津や荒尾まで達し、ここで放生津潟に注いでいたことが水田の区割りや芦原・舟入・大深などの地名から伺える。また①・②の分流地点付近から現在の湊口に向かう流路（第5図④、山町川の前身か）の存在も指摘されており、蜜柑川遺跡の試掘調査結果がこれを裏付けている。これらの河川がいつ頃まで流れていたかは諸説があるが、出現時期については、河川の自然堤防上に繩文時代の遺跡が存在し、また河川が日本海に注ぐ地

名 称	所 在 時 期	備 考
禪興寺	13世紀後半～14世紀後半	禪興寺・長徳寺廃寺跡、南北朝時代に焼失。
石塔院	?～14世紀後半	禪興寺・長徳寺廃寺跡、禪興寺山内に所在。正平十九年に飛騨の僧乗船が写経を行う。
長徳寺	14世紀前半～15世紀末	元大慈院、禪興寺の山内に西隣する尼寺。
報土寺	13世紀末～15世紀末	報土寺廃寺跡、久々淵所在両説あり。
興化寺	14世紀前半～15世紀末	興化寺跡・大石川遺跡、天正大地震の際に伽藍の全てが庄川河床に沈んだという。
兜率尼寺	14世紀前半～15世紀末	一本杉B遺跡～万福寺遺跡周辺?、興化寺の北側地続きに所在したとされる同寺の尼寺。興化寺とともに廃絶か。
大光	不明	米光寺跡?興化寺山内の施設か。
能建寺普照院	15世紀末頃?	荒屋地内?延徳三年細川政元・冷泉為広が越後下向の往路に宿泊。
興福寺	15世紀末頃?	荒屋地内?延徳三年細川政元・冷泉為広が越後下向の復路に宿泊。
正光寺	15世紀末頃?	荒屋～神保寺付近?明応三年、足利義材が仮御座所として使用。
六動寺	不明	六渡寺遺跡、「越中志徵」に記載あり。「源平盛衰記」では「六動寺の國府」。

第1表 中世放生津所在寺院



第5図 中世放生津と寺院等所在推定地 (1/25,000) (青木一彦他 1998より加筆・修正)

点に海谷が発達していることから、少なくとも弥生時代以前の古い時期まで遡ると考えられる。

中世放生津にこれらの大河川が流れ込んでいたということは、町並の範囲や、寺院の所在地などが必ずしも限られてくることになる。これに石造物の所在地を加えてみると、大きく分けて西新瀬、三日苜根、立町、荒屋の4か所にまとまる傾向があり、それぞれのまとまりには禪興寺・長徳寺、興化寺、報土寺、正光寺の所在地が推定されている（第5図）。禪興寺・長徳寺は①・④の流路間に位置する。興化寺は②・③の合流地点に位置し、文献には北側地続きに兜率尼寺の所在が確認できる。他にも大光と呼ばれる施設が存在していたとされるため、大石川遺跡や米光寺塚、専念寺付近の石造物もこの寺院との関連を想定することができる。正光寺・報土寺の所在地については不明な点が多いが、正光寺は足利義材が放生津に逃れた際に仮御座所としていたことから、神保氏の拠点である放生津城の近くに、報土寺は時宗が武家と密接な関わりを持っていたことや東放生津に所在していたという記述から、②・③より東側の守護所付近の報土寺庵跡や、「尊念寺由来書上」にある旧法土寺村付近と推定できる。

以上のように寺院の所在推定地や石造物の分布・出土場所から、ほとんどの石造物が現位置を保っていないとはいっても、ごく限られた範囲内での移動と考えることができる。また寺院等の所在推定地が河川付近に位置することは、明らかに水運の利便性や水源としての防御性を重要視する意識の表れであろう。舟による水運が交通・物資運搬の重要な役割を担っていたことは、明治時代の地籍図に見られる河川や水路が現在の主要交通路と重複していることからもわかる。万福寺遺跡・蜜柑田遺跡・一本杉日遺跡は④の流路に沿って所在する遺跡であり、港町周辺の石造物や市指定文化財越前大甕も河川からの出土である。特に寺院については石造物や、その他の必要物資もかなりの量であったはずであり、水運によってこれらを運んでいたとは想像に難くない。興化寺が天正大地震の際に庄川河床に埋もれたという記述は、寺院が大河川の合流地点付近という洪水の被害を受けやすい場所に所在していたことを示しているが、これも水運の便を考慮しての選地と考えられる。このことから寺院のみならず放生津の人々にとどても河川を利用した水運が生活に密接に関係した重要なものであったことが伺え、河川からの出土遺物を運搬の途中、何らかの原因で河川に落下したものとすることも不自然なことではない。中世の放生津は放生津潟や河川を利用した水上交通・運搬によって支えられていたのである。

4 小 結

今年度の調査対象地区は鎌倉・室町時代に越中の政治・経済の中心地として栄えた放生津の町にあたる。当地区は既に市街地化が進み、踏査が可能な範囲が極端に少ないなど地形条件に恵まれず、結果的に僅かながらも遺物が採集できた場所は社寺の境内地のみという状況であった。ただ昭和63年～平成3年にかけて行われた放生津城の試掘調査から、中世期の放生津は地下1m以上の現在の海面下に没していることが考えられるため、現在地表からの観察は不可能に近いといえ、逆に考えれば地下深くに往時の遺構が良好に残されている可能性も十分にある。歴史的環境から見ても市街地の大部分が中世以来の放生津の歴史を受け継いで発展してきたことは明らかであり、今後は市街地においての調査の進展や遺跡範囲の把握、調査方法などの検討が必要となる。

本報告書	黒道跡番号	本報告書等	黒道跡番号	「昭和47年富山県遺跡地図」	「平成2年富山県聖文化財包括地図」	「昭和47年富山県遺跡地図」	備考
1 高周波遺跡	203003	周知	203003	高周波遺跡	古代	238 高周波遺跡	須恵
2 八幡宮遺跡	203002	周知	203002	八幡宮遺跡	古代・中世・近世	235 八幡宮遺跡	須恵
3 放生津台場跡	203001	周知	203001	放生津台場跡	江戸	244 放生津台場跡	江戸
4 荒屋遺跡	203004	周知	203004	荒屋遺跡	中世	236 荒屋遺跡	須恵
5 神保寺遺跡	203005	周知	203005	神保寺遺跡	室町	237 神保寺遺跡	不明
6 放生津城跡	203006	周知	203006	放生津城跡	兼倉～室町・戦国・近世	246 放生津城跡	鎌倉～室町
7 墓土寺廬寺跡	203007	周知	203007	法土寺廬寺跡	兼倉・室町	245 法土寺廬寺跡	鎌倉～室町
8 人石川遺跡	203009	周知	203008	一本杉A遺跡	古代	222 一本杉A遺跡	須恵
9 一本杉A遺跡	203008	周知	203009	大石川遺跡	中世	223 大石川遺跡	不明
10 興化院寺跡		新規				248 興化院寺跡	南北朝・室町
11 一本杉B遺跡	203010	周知	203010	一本杉B遺跡	弘生・中世	224 一本杉B遺跡	土師
12 寒柑田遺跡	203012	名称変更	203012	禪興寺廬寺跡	兼倉・室町	225 禪興寺廬寺跡	旧禪興寺廬寺跡
13 背戸狹間遺跡	203015	周知	203015	背戸狹間遺跡	弘生・古代	228 背戸狹間遺跡	須恵・土師
14 金屋畠遺跡		新規				228 金屋畠遺跡	平成5年包蔵地地図まで背戸狹間遺跡に含まれる
15 川原遺跡	203013	範囲変更	203013	川原遺跡	古代	226 川原遺跡	須恵・十郎
16 烏帽子形遺跡	203014	範囲変更	203014	烏帽子形遺跡	古代	227 烏帽子形遺跡	須恵・土師
17 万福寺遺跡		新規					
18 禪興寺・長徳寺廢寺跡		統合・範囲変更					203011 禪興寺廢寺跡・203012長徳寺廢寺跡を統合
19 六渡寺遺跡		新規					高岡市三日曾根遺跡と同一分
20 長徳寺廢寺跡	203011	欠番	203011	長徳寺廢寺跡	兼倉・室町	243 長徳寺遺跡	禪興寺・長徳寺廢寺跡に統合・範囲変更

第2表 平成13年度調査遺跡一覧

III 調査のまとめ

今年度の調査をもって5年に渡って実施した分布調査を終了した。ここでは調査の結果明らかとなつた各時代の遺跡の動向を概観し、調査のまとめとしたい。

射水平野は縄文時代早期～前期の海進の頃には標高約5mの付近まで海水が入り込み、市域はいうまでもなく、射水平野の大部分が海面下であったというのが現在の定説である。その後縄文時代中期頃には、射水平野でも比較的標高の高い小杉町の黒河や中老田周辺に遺跡が分布するようになる。遺跡の平野部への進出は、河川の堆積作用や気候の寒冷化による海退現象によって進展した、射水平野形成の歴史もあるといえる。

現在市内で確認されている最古の縄文土器は、津幡江地内で採集された中期前葉新崎式のものである。

後期以降では、高木・荒畠遺跡で昭和60年の調査時に後期前葉の気屋式土器が出土しており、津幡江地内の試掘調査では海拔マイナス0.6mの場所で中期末～後期前葉とされる深鉢底部の出土が知られている。その他、時期は不明ながら松木遺跡・川原遺跡でも縄文土器片や打製石斧が試掘調査時に出土しており、表探資料として、久々渓地内の晩期中葉中尾式上器や、下久々江遺跡・鏡宮北遺跡・本江針山西遺跡の資料が知られている。また現在所在不明ではあるが、善光寺や荒屋地内においても過去に縄文土器の出土が報告されており、時期差はあるが、縄文時代中期以降の遺物の分布は放生津潟隣接地や海岸線付近にまで見られる。

これら縄文土器の分布は主として河川流域の微高地や自然堤防、海岸線付近の砂丘地帯に位置すると考えられ、縄文時代中期以降に平野部で遺跡が出現するという点では県内各地域と同様の傾向をみせる。

しかし、市内で知られる縄文土器のうち、高木・荒畠遺跡以外は試掘調査や表面採集によるものであり、まだ点的に分布をとらえているにすぎず、遺跡の内容を把握するには至っていないのが現状である。また試掘調査等での出土品も量的にはごく僅かなものであり、形成途上の射水平野に人々が生活の場を広げていったとしても、平野部のなかでも特に標高が低く、古放生津潟や周囲に広がる湿地帯が大部分を占める新渓市域においては、完全な定着をみなかつたものと考えられる。

弥生時代になると市内の遺跡数は急増し、分布もほぼ市内全域に広がりをみせるようになる。背戸狭間遺跡・高島A遺跡・作道遺跡・朴木C遺跡・松木遺跡・津幡江遺跡等では中期中頃～後半頃にかけての遺構及び遺物が確認され、平成9年に本発掘調査が行われた高島A遺跡では、中期後半頃の堅穴住居や方形周溝墓が見つかっており、人々が長期にわたって安定した生活を営んでいたことがわかる。

これらの遺跡は縄文時代の遺跡と同様に、河川流域の微高地や自然堤防上に位置するものであるが、縄文時代後・晩期～弥生時代にかけては、気候の寒冷化とそれに伴う海面の低下によって、射水平野の大部分が陸地化し、放生津潟もマゴモ・ヨシ等の生い茂る低湿地となっていた時代である。藤井昭二氏や間坂儀三郎氏らの研究によると、海面は現在より少なくとも2m程低下し、当時これらの遺跡所在地はむしろ標高的には高位に位置していたとされる（藤井1964・間坂1966）。

弥生時代中期頃には県内でも水稻耕作が定着するが、灌溉技術の未発達な当時では、大規模な灌溉を特に必要とせず、ほぼ現状のまま耕地として利用可能な潟周辺の低湿地が、水稻耕作を行う上で非常に適した環境であったと考えられる。そしてそこに住む人々が、点在する微高地に集落を形成し、周

圃に広がる低湿地帯を利用して水稻耕作を行っていたであろうことは想像に難くない。市内の各遺跡や高岡市牧野地区の弥生時代遺跡・下村加茂遺跡などの放生津潟外縁部に位置する遺跡が、弥生時代前期～中期にかけて、県内でも比較的早い段階に出現していることからも、この地域が農耕を基盤とする集落を形成するうえで有利な条件を有していたことを示している。

なお、庄川下流に位置する高岡市上牧野新庄川遺跡や、先述の下村加茂遺跡では弥生時代前期に遡ると思われる土器や石器が出土しており、弥生時代前期の段階で射水平野にも稻作の情報がもたらされたいた可能性が指摘されている（新湊市2000）。現在市内の遺跡で存在が確認できるのは弥生時代中期以降であるが、この弥生時代前期～中期までの空白を考える資料として、新湊市南部中学校郷土クラブが昭和43～46年にかけて採集した遺物がある。採集遺物台帳の中には「繩文文化接触」・「伊勢湾弥生文化圏文化手法」・「貝殻施文」等の記載があることから、東海系土器との関連が想定でき、北陸地方最古の弥生式土器とされる柴山出村式期の遺跡の存在が推測できる。現在これらの資料の多くが散逸してしまっているのが残念であるが、今後の調査で新湊市を含む射水平野一帯に、繩文時代晚期～弥生時代前期頃に、庄川水系ルートで東海地方から弥生文化が波及したことを示す資料を発見できる可能性がある。

弥生時代後期～古墳時代前期にかけては、弥生時代中期以来の遺跡が引き続き存在し、また放生津潟東側の本江周辺にも分布範囲を広げるなど遺跡数は増加傾向をみせる。しかし古墳時代中期以降になると、転してその数は減少してゆく。後期に至っては遺跡はほとんど見られなくなり、朴木A遺跡や今井遺跡で、須恵器・土師器のみが単独で出土している程度である。

射水平野全体をみると、遺跡は平野南部の射水丘陵や東部の神通川左岸・呉羽山丘陵付近で増加する傾向がある（武山2000）。平野の南部や丘陵地付近に遺跡が移動してゆく背景には、気候の温暖化による海岸線の後退や放生津潟の拡大など、環境の変化も関わっていると考えられる。また平野部を取り囲む小矢部川左岸の丘陵地～呉羽山丘陵一帯に古墳時代を通して数多くの古墳が造営されることから、これらの古墳の造営主体となる集落が丘陵地付近に営まれ、平野部の多くの小集落が、古墳群を造営した地域の中心的な集落に統合されていったことが考えられる。丘陵地を持たない本市では古墳は確認されてはいないが、それでも中曾根遺跡や神通川左岸一帯の沖積地に集落が展開することは、平野部一帯がこれら中心的集落の生産基盤として引き続き利用されていたことを表すものであろう。

古代の遺跡は、大島町北高木遺跡から続く高木・荒畠遺跡や朴木周辺を中心とする神楽川流域、塚原地区の庄川付近、放生津潟東側の本江東遺跡周辺を中心としてみられ、善光寺・堀岡など海岸部付近でも遺物の出土が知られている。

古代の射水郡では中央集権的な律令制度の下で、国府や郡衙を中心とする行政や、東大寺・西大寺など中央の大寺院主体の開発が展開されていた。市内でも、古代末期に成立した国衙領の川口保・塚原保が現在の川口・寺塚原・沖塚原一帯に、下村北部を中心として広がる西大寺領櫟山庄が本江付近に比定されており、所在推定地付近にはそれぞれ古代の遺跡が存在する。しかし川口・寺塚原・沖塚原に所在する遺跡は小規模なものであり、また現在の海岸汀線付近に位置する本江東遺跡では土鍤の出土が多く、善光寺付近でも土鍤の出土が報告されていることから、海岸部に分布する遺跡の多くは、大伴家持の奈良の歌にみられるような漁業を営む集落であったと考えられる。このことから集落が国衙領や荘園内に所在したとしても、その中心的な役割を担っていたとは考えられず、開発主体や、郡の統治機構の中心

部は伏木の国府周辺や北高木遺跡など、街道や水運による交通・運搬の利便に恵まれた場所に立地していたと考えられる。特に北高木遺跡周辺は射水平野の中心付近に位置し、古代北陸道や神楽川水系を利用した交通・運搬の利便に恵まれた場所であり、また須恵器や製鉄などの生産関連遺跡が集中する射水丘陵一帯と伏木の国府とを結ぶ重要地点で、射水郡内の統治や生産・流通を一体化した計画的配置となっていたことを示す。そして環境の面からも、津幡江付近で遺跡が減少することや、古代北陸道が放生津潟を迂回、あるいは海岸線の砂丘上を通るコースと推定されていることから、気候の温暖化によって放生津潟が再び拡大し、市内一帯、特に津幡江付近に広大な低湿地が広がっていたことが想定され、大規模な集落を形成しうる環境ではなかつたことが伺える。

中世期には放生津が守護所所在地となり、射水郡内だけでなく越中国全城の政治・経済的中心地として発展した。放生津は天然の良港である放生津潟を擁し、潟に注ぐ大小の河川によって射水郡全城・砺波郡・婦負郡の一部とも繋がっており、物資運搬の多くを舟に頼っていた当時、日本海側でも屈指の湊町であった。北条氏の一門や室町幕府の督領家が守護を歴任し、各宗派の大寺院が数多く所在していた背景にもこの湊による経済的繁栄が深く関わっていたものと考えられる。周辺の遺跡も片口・七美地区を除くほぼ市内全域に分布し、浜街道・草島往来等の街道沿いや、神楽川流域など放生津を中心とした交通の要所に立地する傾向がある。また中世期石造物の分布状況や文献資料等から海老江・作道・塚原周辺の現在も残る集落の多くが、この時期には存在していたことが確認できる。

近世以降には中世以来の集落の他に、船岡や片口などこれまでに遺跡の分布しなかつた場所にまで集落が拡大し、ほぼ現在の集落が出揃う。これらの新しい集落は主に近世前期を中心として村立てされたものであり、現存する文献には、近世に放生津潟周辺の湿地帯の開拓が盛んに行われていったことが記されている。

以上のように、市内には縄文時代中期～近世の各時代にわたっての遺跡が存在する。新湊市域は県内でも最も標高の低い沖積地に位置し、放生津潟を中心とする低湿地が大部分を占める。そのため気候の寒冷期には全体的に遺跡が増加し、温暖期になると海岸の砂丘地帯や東南部の比較的標高の高い場所に移動するなど、各時代の遺跡の動向が、気候の変化による海水面の上昇・下降に大きく影響されていたことがわかる。また放生津潟に流れ込む大小の河川は、過去に度々氾濫を繰り返してその都度流路を変えたため、この地で生活する人々は長い間水との戦いを強いられてきた。それでも農耕を基幹とする生産体系が確立した弥生時代以降は、広大な低湿地が肥沃な耕作地となり、中世には放生津の町を守る天然の防御施設としてそこに住む人々に恩恵を与えていたと思われる。

このような歴史的・地形的背景が原因したためか、分布調査の結果、個々の遺跡においての採集遺物に時期的なまとまりがみられない場合が多く、河川の氾濫による地形の変化が著しいうえ、耕地整理がほぼ完了している現在では旧地形の復元が困難を極めた。そのため結果的に遺跡の中心的な時期が絞り込めず、内容の不明な散布地が多いという問題点を残すこととなった。発掘調査においても、地盤が軟質で湧水点が高いため、地下深くに所在する遺跡の把握は難しく、また中世放生津の町は現在の市街地と重複しており、調査を行うこと自体が難しいという問題がある。市内全城を網羅した今回の分布調査の成果を今後さらに活かしてゆくため、調査方法の確立や遺跡地図記載情報の精度を高め、広く周知に努めてゆく必要がある。

引用・参考文献

- 青木・彦他 1996 「射水平野の遺跡－古代北陸遺を探る－」『大境第18号』富山考古学会
- 青木・彦他 1998 「中世の放生津について」『大境第19号』富山考古学会
- 岡崎卯一 1966 「利波弥生遺跡の調査」『放生津潟周辺の地学的研究第三集』富山地学会編
- 上市町教育委員会 1985 「弓の庄城跡第5次緊急発掘調査概要」
- 京田良司 1976 「富山県の石造美術」
- 久々忠義 1992 「放生津城跡を掘る。新湊市民文庫11」
- 久々忠義 1999 「下村加茂遺跡の紀元を探る－下村加茂遺跡発掘報告」下村生涯学習叢書2
- 久々忠義 2000 「中世の城と町と川」『北陸の中世城郭第10号』北陸城郭研究会
- 久々忠義・林寺巖州 1994 「射水平野の遺跡－神奈川流域を探る－」『大境第16号』
- 久保尚文 1984 「越中における中世信仰史の展開」
- 下村教育委員会 1999 「下村加茂遺跡発掘調査報告書」
- 新湊市 1964 「新湊市史」
- 新湊市教育委員会 1998~2001 「新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ~Ⅳ」
- 新湊市教育委員会 2000 「本江東遺跡発掘調査概要」、同「高島A遺跡発掘調査概要」
- 新湊市善光寺自治会 1995 「善光寺のあゆみ」
- 新湊市立南部中学校郷土クラブ 1971 「古代遺跡中露出遺物拾得内訳明細書」
- 新湊町史実研究会 1938 「新湊町史料第1輯」
- 高岡市教育委員会 1995 「高岡市埋蔵文化財分布調査概報」－平成6年度、牧野能町地区の遺跡分布調査－
- 尚瀬保 1964 「古文書からみた放生津潟の変遷と射水平野の形成」『放生津潟周辺の地学的研究』富山地学会編
- 武田健次郎 2000 「利波・射水平野における遺跡群の展開」『富山考古学研究第3号』
- 財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 富山県教育委員会 1972 「富山県遺跡地図」
- 富山県教育委員会 1993 「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」
- 富山県農地林務部は場整備課 1984 「付図表層地質図」「土地分類基本調査」
- 西井龍義 1992 「池尻石塔群」『井口村史下巻(資料編)』
- 氷見市教育委員会1985 「祓出薬師中世墓」
- 氷見市教育委員会2001 「龍方谷内出土中世墓」
- 藤井昭二 1964 「地質からみた射水平野の形成と放生津潟の変遷」『放生津潟周辺の地学的研究』富山地学会編
- 文化財保護委員会 1965 「全国遺跡地図(富山県)」
- 北陸中世考古学研究会 2000 「中世北陸の石塔・石仏」
- 本江洋・吉久登・小島俊彰 1981 「新庄村遺跡出土遺物の紹介」『大境第7号』富山考古学会
- 間坂儀三郎 1966 「放生津潟西岸の牧野地区内古代遺物」『放生津潟周辺の地学的研究第三集』富山地学会編
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 吉久登 2000 「古代奈良の江を探る」

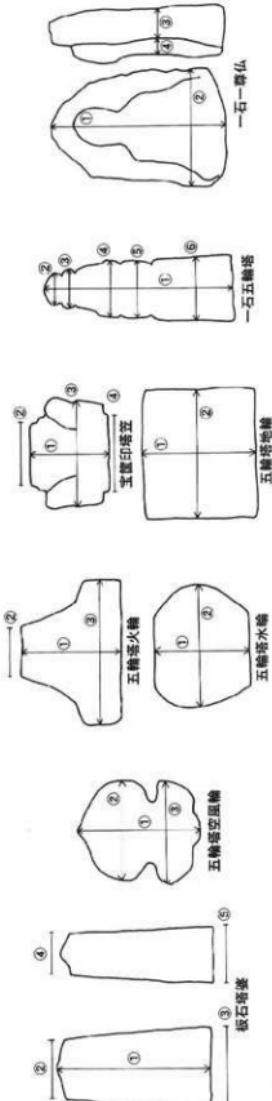
第3表 中世期石造物一覽

番号	所在地	種別	計測値				石材	分類	時代	備考
			①	②	③	④				
1	西福寺	板石塔婆	32.7	12.3	15.7	9.8	12	15世紀中期～末期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
2	西福寺	板石塔婆	37.5	12	17.2	10.5	11.7	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
3	西福寺	板石塔婆	42.3	14	15.8	12.8	16	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
4	西福寺	板石塔婆	39	16	18.7	10.5	10	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
5	西福寺	板石塔婆	40	13.5+	18.3	10.2	13.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
6	西福寺	板石塔婆	46	15	18.7	13.9	17	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
7	西福寺	板石塔婆	66	16.5	20.5	10	15.3	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
8	西福寺	板石塔婆	47	16	23.2	13.8	16	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
9	西福寺	板石塔婆	45.5	13	16.5	11.4	13.3	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
10	西福寺	不明	56.1	17.6	20.1	14.6	16.5	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
11	西福寺	板石塔婆	58	16	22	15.8	18.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
12	西福寺	板石塔婆	54	18.6	23	16.5	18	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
13	西福寺	板石塔婆	59	18.6	23.8	14	18	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
14	西福寺	板石塔婆	59.8	21.7	26.6	20	24	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
15	西福寺	板石塔婆	58.2	17	21.4	10.5	16.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
16	西福寺	板石塔婆	61.1	20	26.2	11.2	22.6	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
17	西福寺	板石塔婆	71.2	19.9	29.5	14.6	23.4	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
18	西福寺	板石塔婆	67.4	19.2	28.5	18.8	24	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
19	西福寺	板石塔婆	71.6	33.2	33.4	30	34	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
20	西福寺	板石塔婆	62.6	22	28.4	19.8	25.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
21	西福寺	板石塔婆	75	17	28.8	16.2	23.4	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
22	西福寺	板石塔婆	69.2	19.3	27.8	20.6	26.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印
23	西福寺	五輪塔火輪	16.7	10	24.7	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
24	西福寺	五輪塔火輪	24.1	12.1	30.3	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
25	西福寺	五輪塔火輪	22.1	13.7	38	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
26	西福寺	五輪塔火輪	16.1	9.7	22.7	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
27	西福寺	五輪塔火輪	22.5	14.3	15.1	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
28	西福寺	五輪塔火輪	67	30.2	36.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
29	西福寺	五輪塔火輪	13.5	8.3	23	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
30	西福寺	五輪塔火輪	14.2	10	24.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
31	西福寺	五輪塔火輪	17.4	7.9	25.3	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
32	西福寺	五輪塔火輪	20.1+	12.6	24.4	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
33	西福寺	五輪塔火輪	22.6	14.1	29.4	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
34	西福寺	五輪塔火輪	17.9	19	28.8	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
35	西福寺	五輪塔火輪	24.9	11.8	26.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
36	西福寺	五輪塔火輪	22	21.3	30.2	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
37	西福寺	五輪塔火輪	67	46	20	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
38	西福寺	五輪塔火輪	39	30.8	46	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
39	西福寺	五輪塔火輪	40	49.5	50	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
40	西福寺	五輪塔火輪	44.1	44.1	50	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
41	西福寺	五輪塔火輪	45.5	45.5	50	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	
42	西福寺	五輪塔火輪	46.6	46.6	50	初期	初期	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	梵字「 <small>ハシニ</small> 」刻印	

第3表 中世期石造物一覧

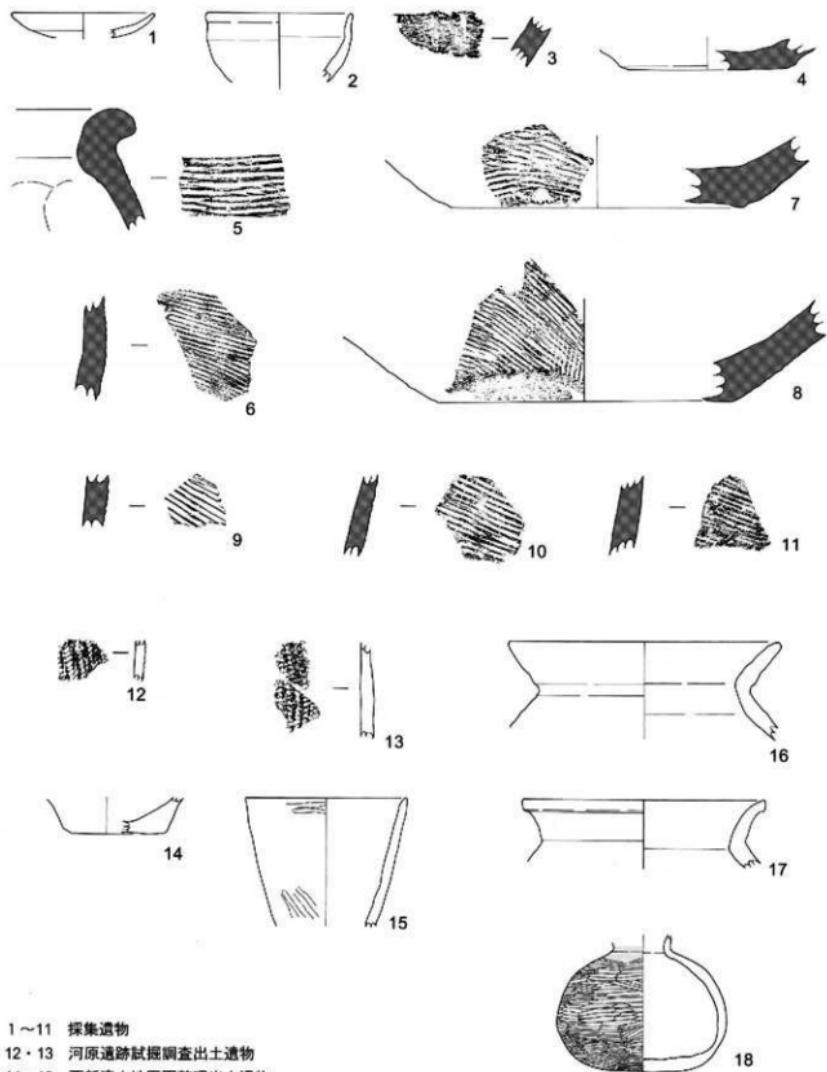
番号	所在場所	種別	(1)	(2)	(3)	計	調査員	石材	分類	時	期	備考	文獻・記録・伝承等	指遺 著者
93	長岡寺	五輪塔空頭輪	24		14.5	38.5		粗粒砂岩		所E-34				○
94	長岡寺	五輪塔火輪	19	14.5	26	59.5		粗粒砂岩		所E-34				○
95	長岡寺	五輪塔火輪	20	16		36		粗粒砂岩		所E-34				○
96	長岡寺	五輪塔火輪	32	18	43	93		粗粒砂岩		所E-34				○
97	長岡寺	板石塔婆	61	21	26	16	21	粗粒砂岩		五輪塔空頭輪、所E-34				○
98	長岡寺	五輪塔火輪	12	18		30		粗粒砂岩		所E-34				○
99	長岡寺	五輪塔火輪	23		16	39		粗粒砂岩		所E-34				○
100	長岡寺	板石塔婆	63	28	22	14	20	粗粒砂岩		所E-34				○
101	長岡寺	板石塔婆	34	16	22	14	20	粗粒砂岩		所E-34				○
102	長岡寺	宝瓶印塔婆?	34	16	22	14	20	粗粒砂岩		所E-34				○
103	牧牛寺半人塔宮	五輪塔水輪?	26.7	30.3		57		粗粒砂岩		所E-34				○
104	光山寺	五輪塔水輪	18.7	24.4		43.1		粗粒砂岩	II	14世紀後半~15世紀初頭				○
105	光山寺	板石塔婆	64.8	19.4	25.4	109.2		粗粒砂岩	III	15世紀中期~16世紀	解説参考 見子(パ)、刻印			○
106	光山寺	板石塔婆?	58	19.5	23.9	91.5	18	粗粒砂岩	I	14世紀中期~前半期				○
107	三日曾地	五輪塔空頭輪	22	16.2	13.9	52		粗粒砂岩	I	14世紀中期~前半期				○
108	三日曾地	五輪塔空頭輪	21.1	14.6	14.8	49.5		粗粒砂岩	I	14世紀中期~前半期				○
109	三日曾地	五輪塔空頭輪	20.9	14.5	14.4	49.4		粗粒砂岩	I	14世紀中期~前半期				○
110	三日曾地	五輪塔空頭輪	20.5	15.4	15.8	51.7		粗粒砂岩	I	14世紀中期~前半期				○
111	三日曾地	五輪塔空頭輪	36.7	21.3	24	82		粗粒砂岩	III	15世紀前半期				○
112	三日曾地	五輪塔空頭輪	18	9.4	23.8	41.6		粗粒砂岩	III	15世紀前半期				○
113	三日曾地	五輪塔火輪	17.9	9.2	19.6	46.7		粗粒砂岩	II?	14世紀?				○
114	三日曾地	板石塔婆	23.5	15	21	11.7	14	粗粒砂岩	II	14世紀?				○
115	三日曾地	板石塔婆	37.5	12.2	15.3	69	8	粗粒砂岩	II	14世紀前半期~未定				○
116	三日曾地	板石塔婆	20.1	16.5	18.2	53.8		粗粒砂岩	VI	14世紀中期~未定				○
117	三日曾地	板石塔婆	37.8	11.2	15.2	11	13.4	粗粒砂岩	VI	14世紀中期~未定	扇部下部以下解説			○
118	三日曾地	板石塔婆	63	16.5	25.4	14.5	19.2	粗粒砂岩	III	14世紀中期~前半期				○
119	三日曾地	板石塔婆	76.4	20.4	27.6	15	20	粗粒砂岩	II	14世紀中期~前半期	扇部右側以下解説			○
120	三日曾地	板石塔婆	41	29	2	6		粗粒砂岩	II	14世紀中期~前半期	扇部左側以下解説			○
121	三日曾地	板石塔婆	52	14.8	20.4	51.8	7.5	粗粒砂岩	II	14世紀中期~後半期	扇部左側以下解説			○
122	三日曾地	五輪塔空頭輪	48	18.8	26	13.8	17.5	粗粒砂岩	II	14世紀中期~後半期	扇部左側以下解説			○
123	西新寺1-7-7P	板石塔婆	55	15.2	19	11.6	14.2	粗粒砂岩	II	14世紀中期~前半期	下脚部浸没			○
124	西新寺1-7-7P	板石塔婆	56.4	19.6	24.4	10.4	14.6	粗粒砂岩	II	14世紀中期~前半期	下脚部浸没			○
125	西新寺1-7-7P	板石塔婆	12.1	10.1	12.1	3.3		粗粒砂岩	II	14世紀中期~前半期	下脚部浸没			○
126	西新寺1-7-7P	板石塔婆	12.5	10.1	12.1	3.3		粗粒砂岩	II	14世紀中期~前半期	下脚部浸没			○
127	西新寺1-7-7P	板石塔婆	12.5	10.1	12.1	3.3		粗粒砂岩	II	14世紀中期~前半期	下脚部浸没			○
128	妙寺寺	五輪塔火輪	19	10	27.1	56		粗粒砂岩	IV	14世紀後半~15世紀前半	扇部化粧しい			○
129	妙寺寺	五輪塔火輪	15		29.5	44		粗粒砂岩	IV	14世紀後半~15世紀前半	扇部化粧しい			○
130	妙寺寺	五輪塔火輪	25	11.5	29.5	60		粗粒砂岩	III	14世紀後半~15世紀前半	扇部化粧しい			○
131	本金寺	五輪塔火輪	20.1	10.2	23.4	53.7		粗粒砂岩	II	14世紀中期~前半期	扇部化粧しい			○
132	米光寺	五輪塔空頭輪	21.5+	18.6	17.7	57.8		粗粒砂岩	II	14世紀後半~15世紀前半	扇部化粧しい			○
133	米光寺	五輪塔空頭輪	48.2	15.4	16.4	27.5		粗粒砂岩	II	14世紀後半~15世紀前半	扇部化粧しい			○
134	本金寺	一石一尊弘	29.5+	21.2	6	6.9		粗粒砂岩	II	14世紀後半~15世紀前半	扇部化粧しい			○
135	本金寺	五輪塔空頭輪	26.5	15	18.5	59		粗粒砂岩	II	14世紀後半~15世紀前半	扇部化粧しい			○
136	本金寺	板石塔婆	59.4	15.8	20.6	13.5	16.6	粗粒砂岩	III	14世紀中期~後半	刻印			○
137	本金寺	板石塔婆	42.5		29	15.7		粗粒砂岩	I	14世紀中期~後半	刻印			○
138	内川御船寺	五輪塔火輪	33.2	15.7	40	94		粗粒砂岩	III	14世紀後半~15世紀前半	刻印			○

番号	所在地	種別	計測値						備考	
			①	②	③	④	⑤	⑥		
139	内川西側近辺	五輪寄火輪	34.8	19.1	44.7				相枕砂岩	W 14世紀末~15世紀初期頃
140	内川西側近辺	宝瓶印塔基盤								所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
141	内川西側近辺	板石塔婆								新和30年代西瓶文夢・青銅出土
142	大石川疊跡	一石五輪寄	43.1	8.4	9.4	16.6	17.3	16.9	相枕砂岩	1 15世紀 14世紀後半~15世紀初期頃
143	港町地蔵堂	一石一塔	70+	45	12				相枕砂岩	II 14世紀後半~15世紀初期頃
144	港町地蔵堂	一石一塔	45+	31	11				相枕砂岩	III 14世紀後半~15世紀初期頃
145	勝手寺地蔵堂	一石一塔							相枕砂岩	III 14世紀後半~15世紀初期頃
146	生糸井地蔵	五輪寄火輪							相枕砂岩	III 14世紀後半~15世紀初期頃
147	生糸井地蔵	五輪寄火輪							相枕砂岩	III 14世紀後半~15世紀初期頃
148	生糸井地蔵	五輪寄火輪							相枕砂岩	III 14世紀後半~15世紀初期頃
149	本波	五輪寄	18		19				相枕砂岩	III 14世紀後半~15世紀初期頃
150	賢空寺	五輪寄							相枕砂岩	III 14世紀後半~15世紀初期頃
151	岩正寺	五輪寄							相枕砂岩	III 14世紀後半~15世紀初期頃
152	山東部中学校	宝瓶印塔基盤								所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
153	万福寺通路	板石塔婆								所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
154	万福寺通路	五輪寄火輪	39.5	12	14	15.8	21	19.7	相枕砂岩	所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
155	万福寺通路	五輪寄火輪	17	11.5	24.8				相枕砂岩	所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
156	万福寺通路	五輪寄火輪							相枕砂岩	所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
157	万福寺通路	五輪寄火輪	26	27.5	28.5				相枕砂岩	所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
158	万福寺通路	五輪寄火輪							相枕砂岩	所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
159	万福寺通路	五輪寄火輪	16	26					相枕砂岩	所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
160	一本松寺通路	板石塔婆								所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
161	得樂寺通路	宝瓶印塔基盤								所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土
162	深見通路	板石塔婆								所在不明 新和30年代西瓶文夢・青銅出土



第6図 石造物計測部位

図 版

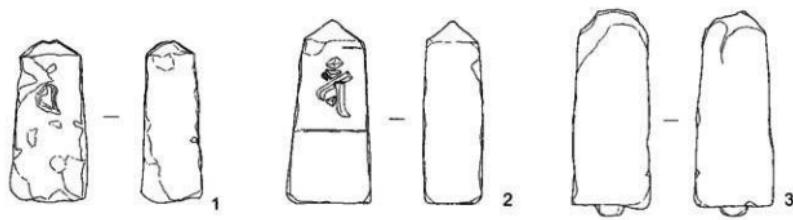


1~11 採集遺物

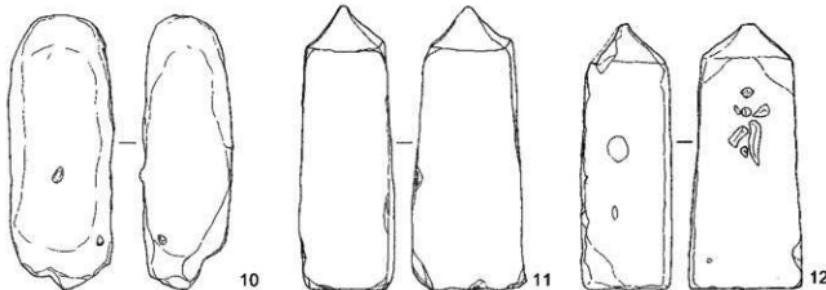
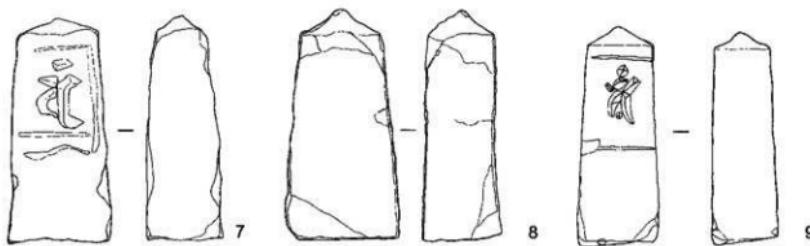
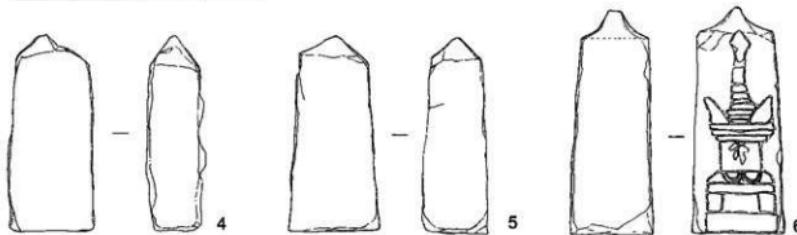
12・13 河原遺跡試掘調査出土遺物

14~18 西新湊土地区面整理出土遺物

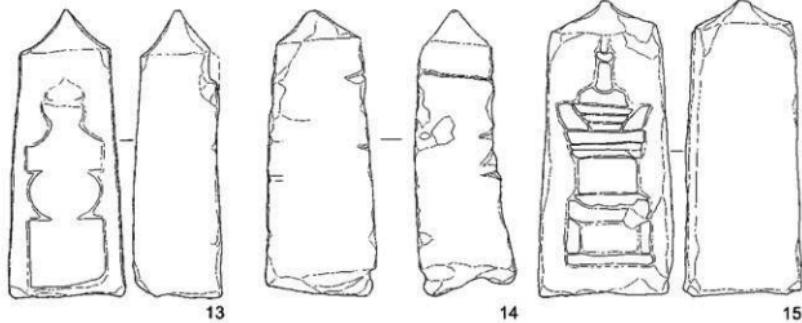
0 5 10 15cm



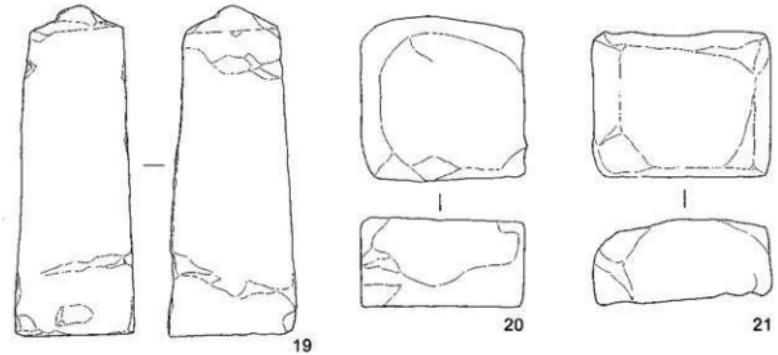
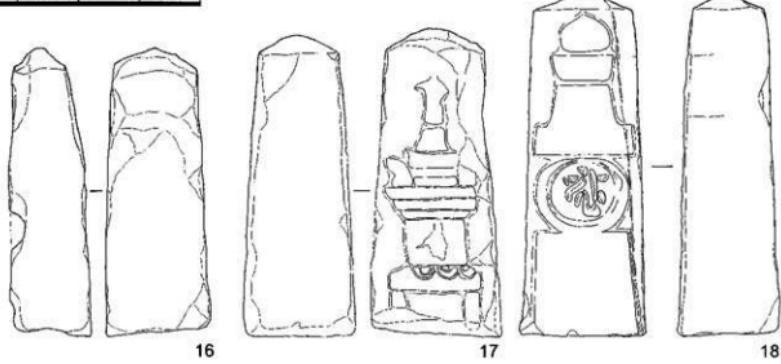
0 25 50cm



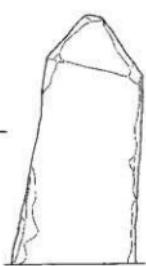
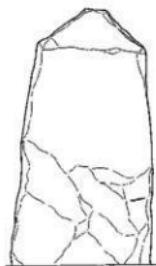
図版2 中世期石造物実測図(1) (1/10)



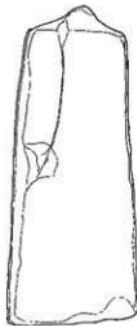
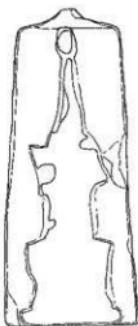
0 25 50cm



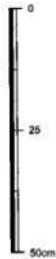
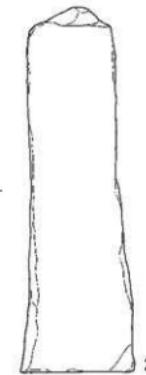
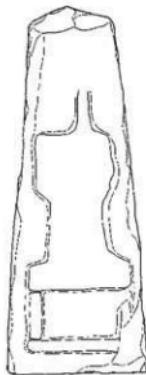
図版3 中世期石造物実測図(2) (1/10)



22



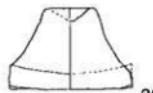
23



24



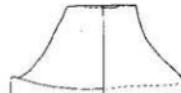
25



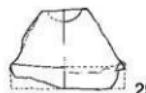
26



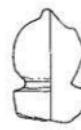
27



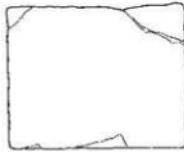
28



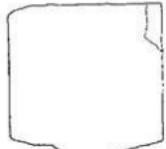
29



30



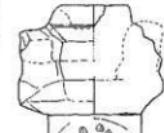
31



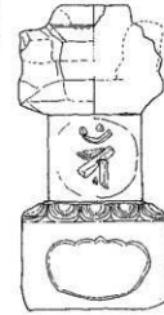
32



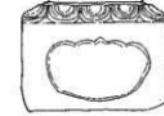
33



34

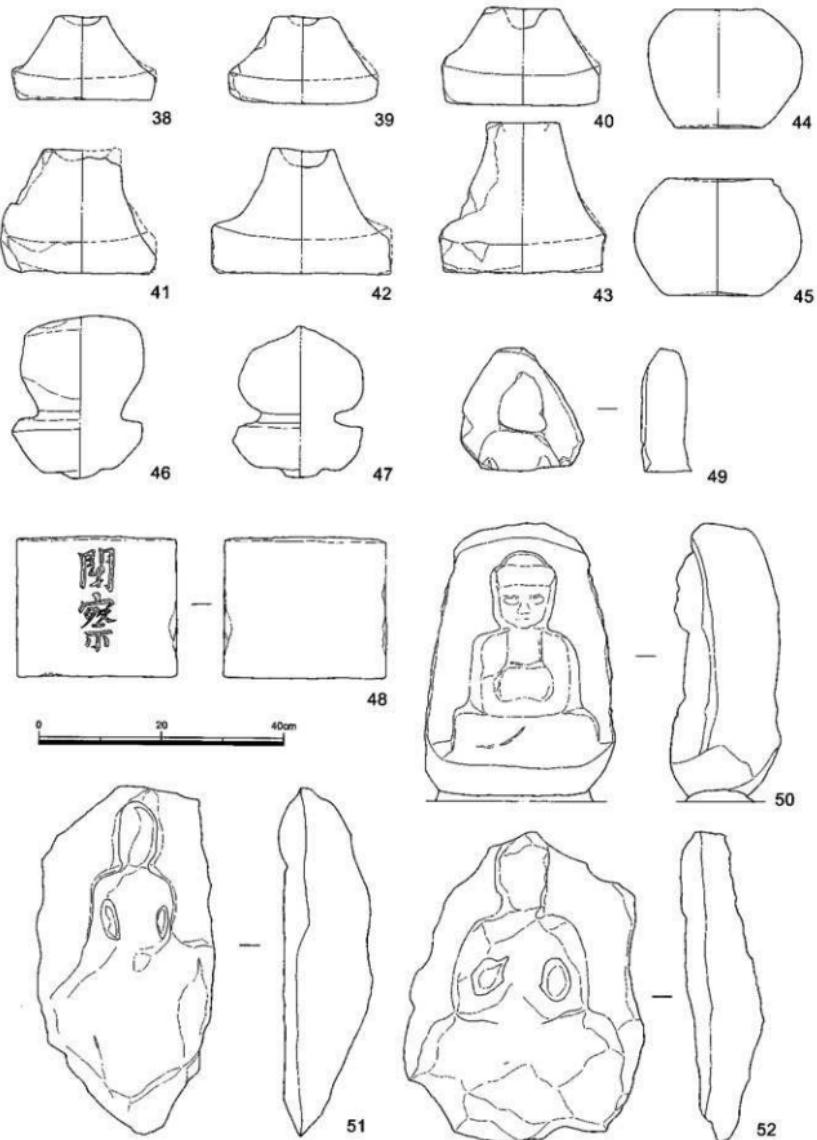


35

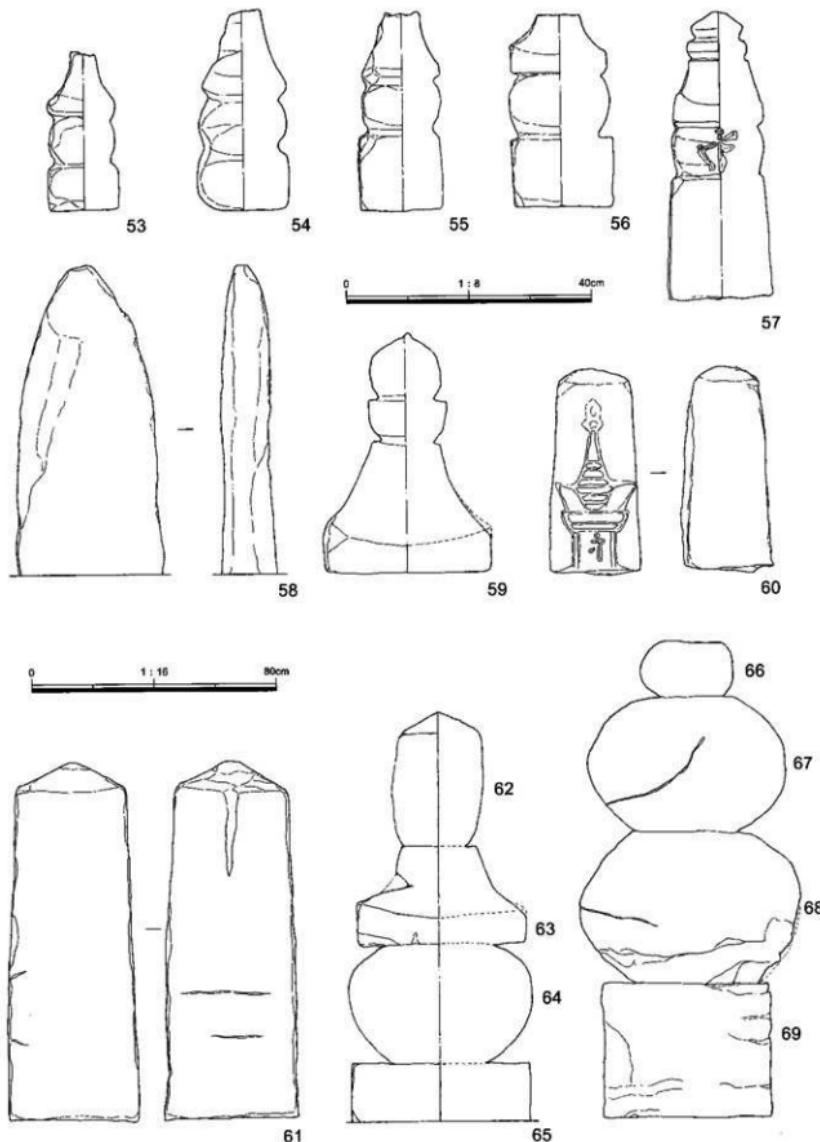


36

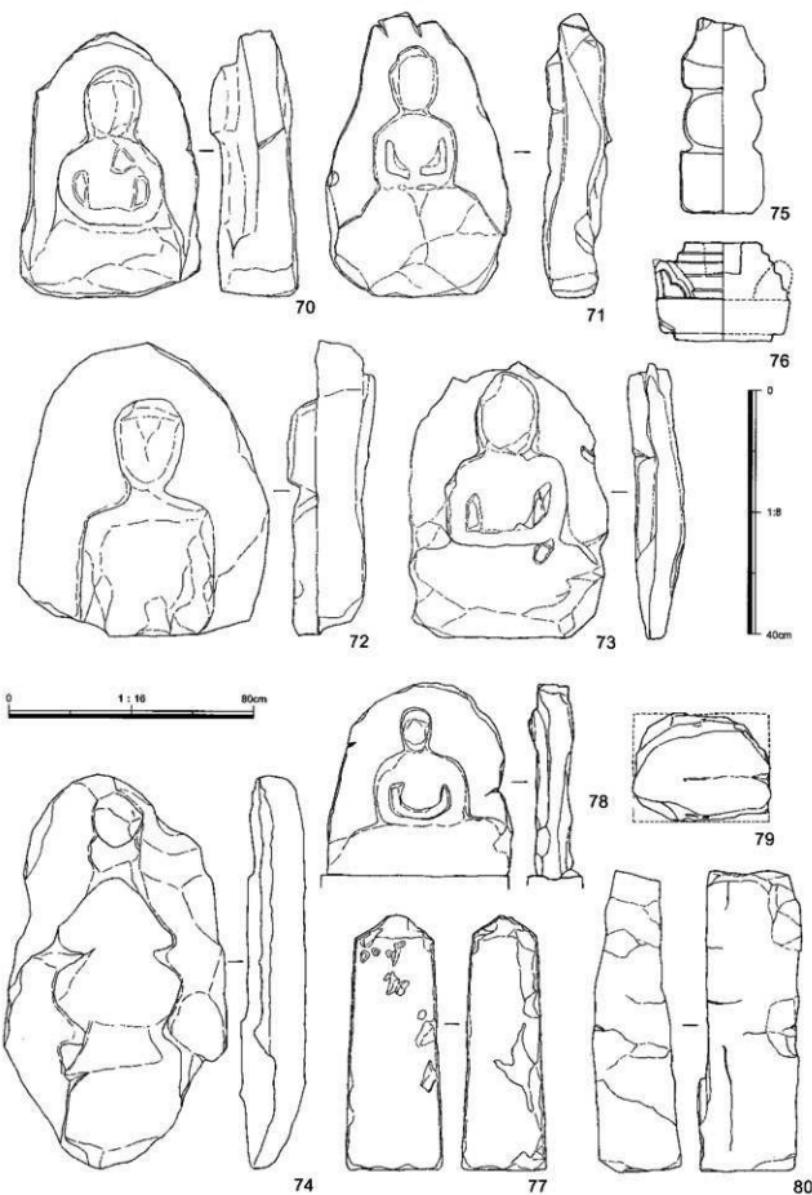
図版4 中世期石造物実測図(3) (1/10)



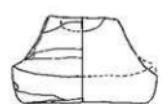
図版5 中世期石造物実測図(4) (1/8)



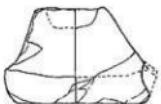
図版6 中世期石造物実測図(5) (53~60: 1/8 61~69: 1/16)



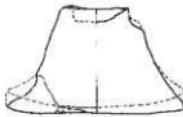
図版7 中世期石造物実測図(6) (70~76・79: 1/8 77・78・80: 1/16)



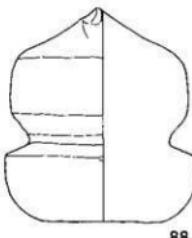
82



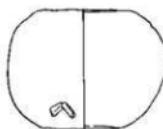
83



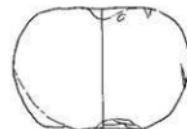
84



88



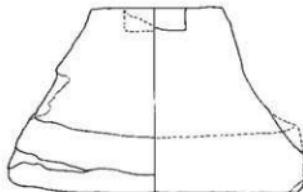
85



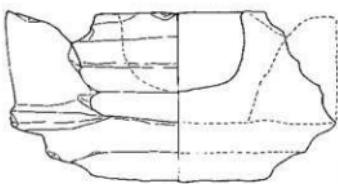
86



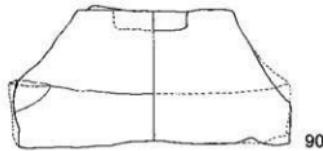
87



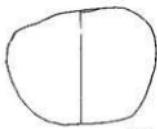
89



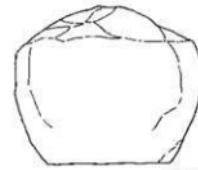
91



90



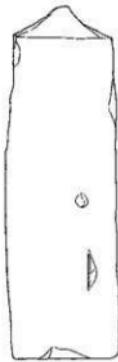
104



103

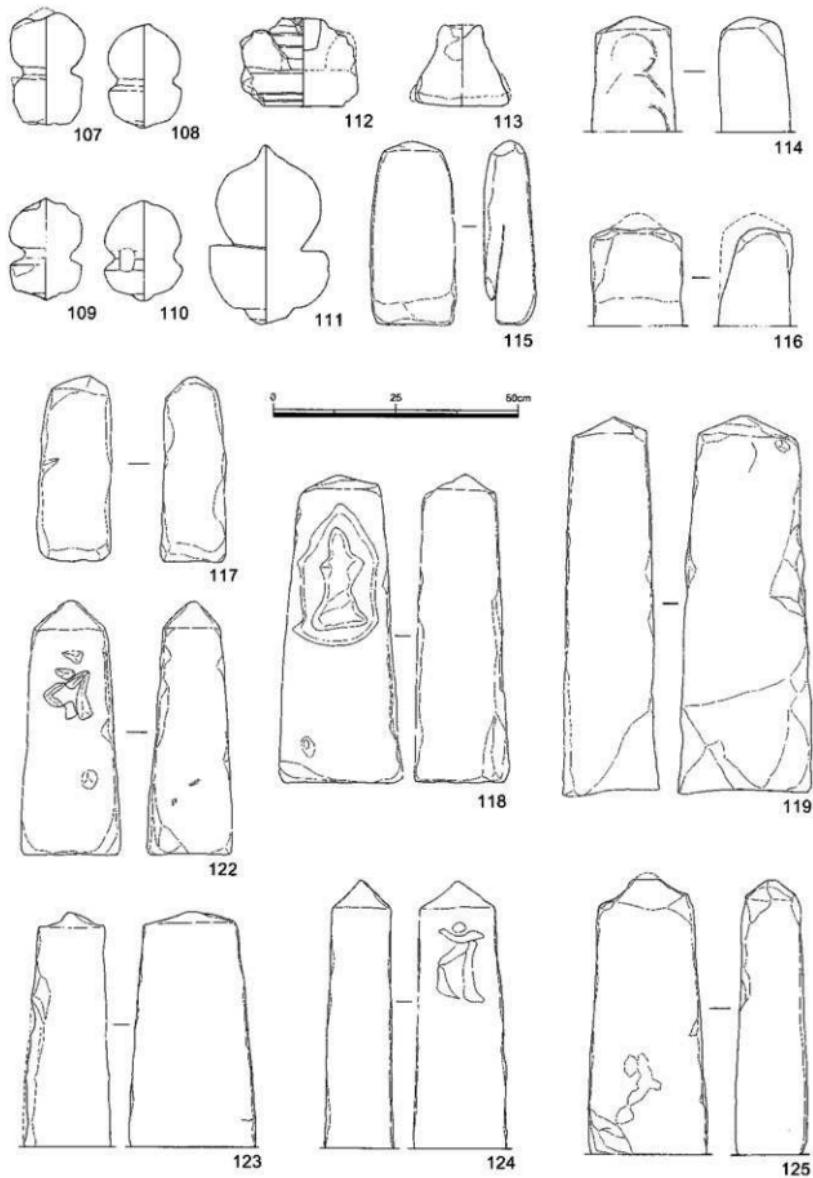


105

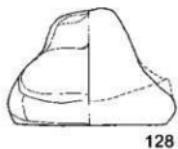


106

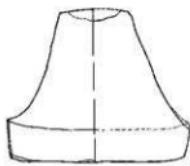
図版8 中世期石造物実測図(7) (1/8)



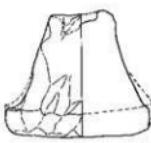
図版9 中世期石造物実測図(8) (1/10)



128



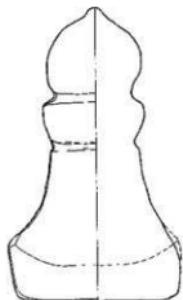
130



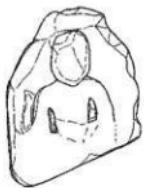
131



132



133



134



135



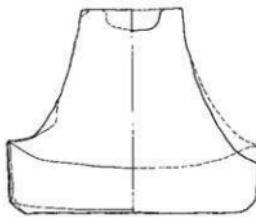
142



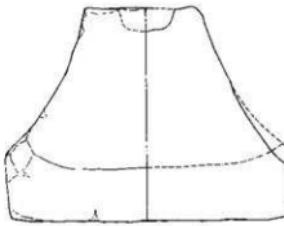
—



136



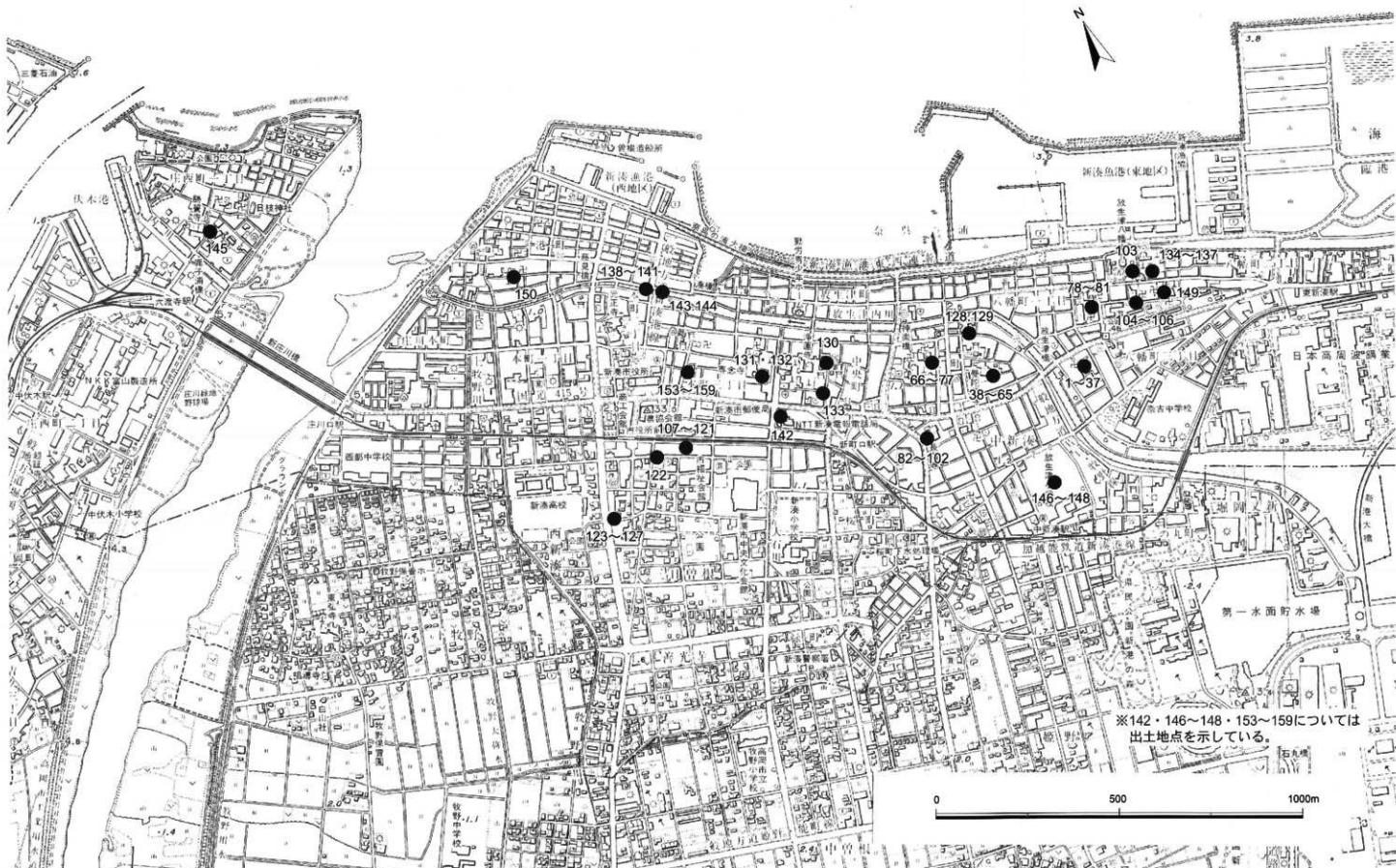
138



139



図版10 中世期石造物実測図(9) (1/8)





図版12 市街地中心部小字図（放生津、荒屋、法土寺、四日曾根、三日曾根、長徳寺地図より作成）

小字一覽									
大字	小字	大字	小字	大字	小字	大字	小字	大字	小字
長徳寺	舟附	三日曾根	目入	四日曾根	茶野木	荒屋	法土寺	二番割	浜
	前田	烏帽子形	荒間		中野坪		中野		中野
	万福寺	中野坪	塚田		代屋		狐島		狐島
	稻荷	高段	五後目		金付免		走下		走下
	大石	前狭間	五反田		五反田		八幡前		八幡前
	一本杉	背戸狭間	古苗代		古苗代		十俵目		十俵目
	塙野一層	高段	潤番匠免		潤番匠免		高野田		高野田
	十俵目	妻佐	湯ノ詰		湯ノ詰		湯ノ詰		湯ノ詰
	後俵目	潤番匠免	江車		江車		江柱		江柱
	目入	金屋畑	金屋畑		金屋畑		舟入		舟入
三日曾根	チリダ	笠掛	荒間		高段		芦原	荒屋	芦原
	笠掛	川原	要佐		要佐		四十刈		四十刈
	川原	中削	直江		直江		長瀬		長瀬
	中削	納戸場	夕暮		夕暮		前田		前田
	大戸場	石名田	大割		大割		百五十町		百五十町
	石名田	野開	大吉		大吉		大深		大深
	野開	金屋畑	知喜礼		知喜礼		知喜礼		知喜礼



E地区航空写真（昭和22年米軍撮影）

この写真は、同土地理院長の承認を得て、米軍撮影の空中写真を複製したものである。
（承認番号）平13北緯、第350号



調査風景
(石造物調査)



調査風景
(石造物調査)



調査風景
(現地踏査)



調査風景
(現地踏査)



調査風景
(石造物調査)



調査風景
(旧地籍図調査)

高周波遺跡
(北から)



八幡宮遺跡
(南から)



放生津台場跡
(東から)





荒屋遺跡
(東から)



神保寺遺跡
(東から)



放生津城跡
(北から)

報土寺麻寺跡
(西から)



大石川遺跡
(南から)



一本杉A遺跡
(西から)





興化庵寺跡
(南から)



一本杉B遺跡
(西から)

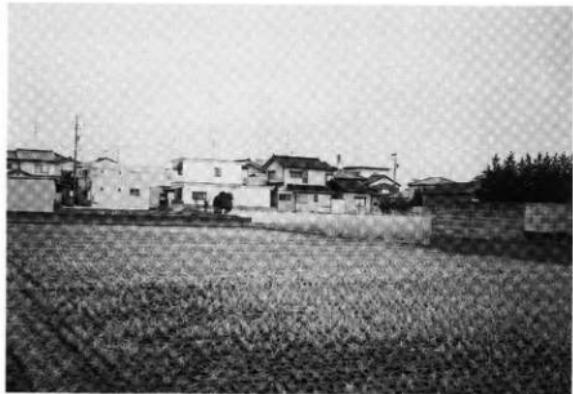


黒柏田遺跡
(北から)

背戸狭間遺跡
(東から)



金屋畠遺跡
(西から)



川原遺跡
(南から)





鳥帽子形遺跡
(南から)



万福寺遺跡
(南から)

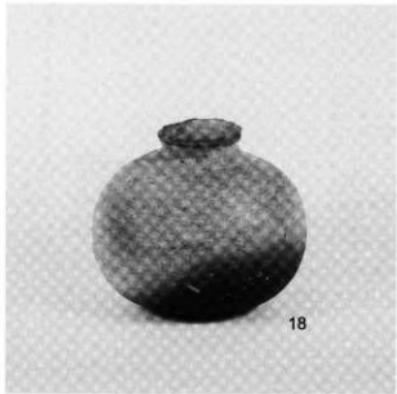
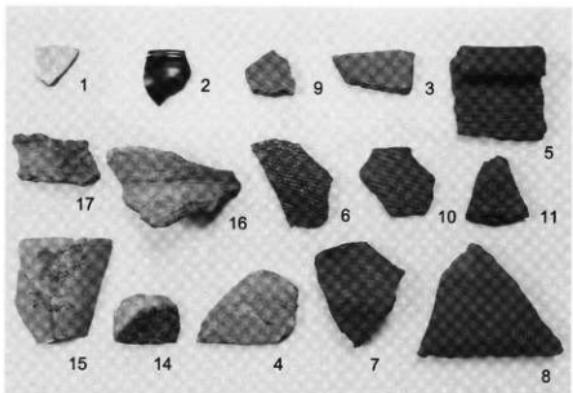


禪興寺・長徳寺廃寺跡
(北から)

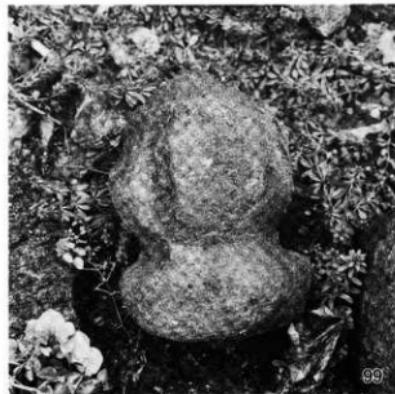
六渡寺遺跡
(北から)

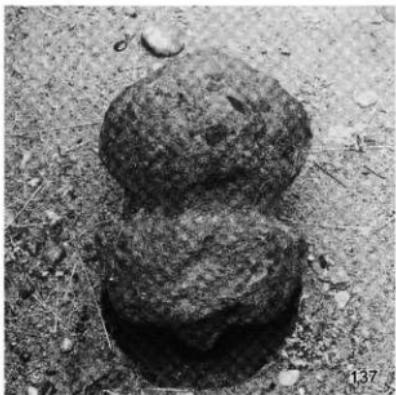
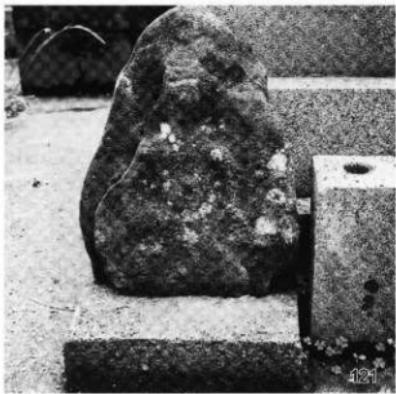


図版 1 遺物

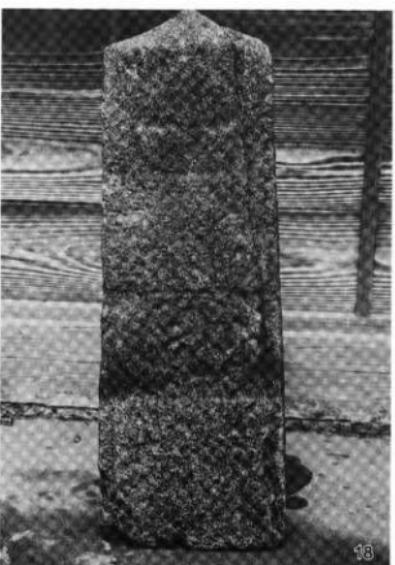


図版 1 遺物

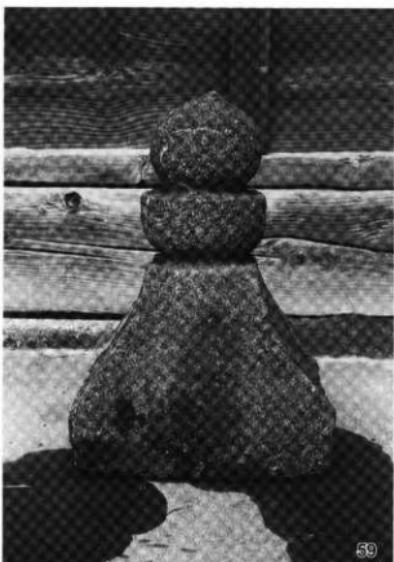




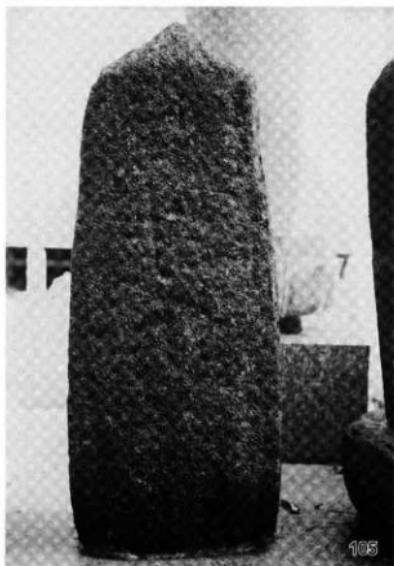
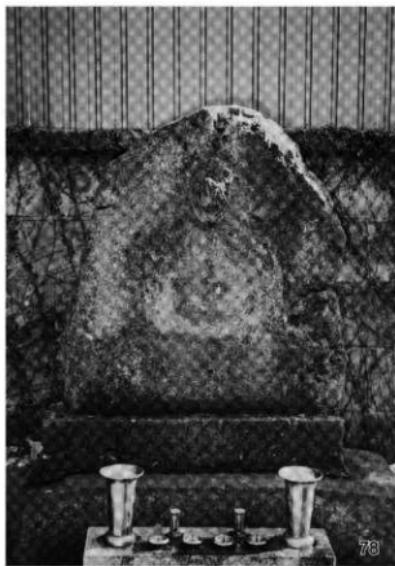


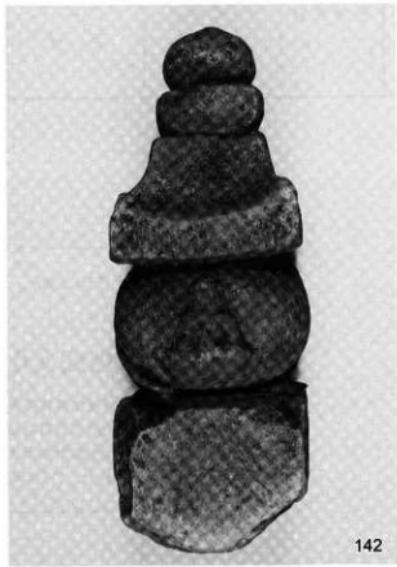
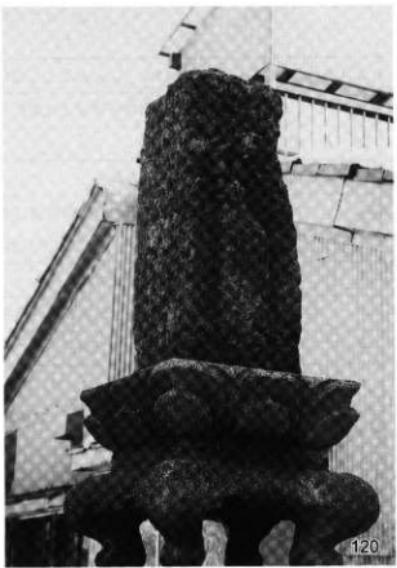












報告書抄録

ふりがな	とやまけん しんみなとしまいぞうぶんかざいぶんぶちょうさほうこくV							
書名	富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告V							
編著者名	金三津英則							
編集機関	新湊市教育委員会							
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312							
発行機関	新湊市教育委員会							
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 mi	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市内遺跡	富山県 新湊市内	016203	—	36° 47' 00"	137° 05' 000"	20010410 ~ 20020329	—	—
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市内遺跡		绳文 ~ 近世		縄文土器 土師器 珠洲 瀬戸美濃 五輪塔 板石塔婆 一石・尊仏 一石五輪塔 宝鏡印塔				

平成14年3月29日発行

富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告V

編集 新湊市教育委員会
 発行 新湊市教育委員会
 富山県新湊市本町二丁目10番30号
 印刷 株タニグチ印刷

